

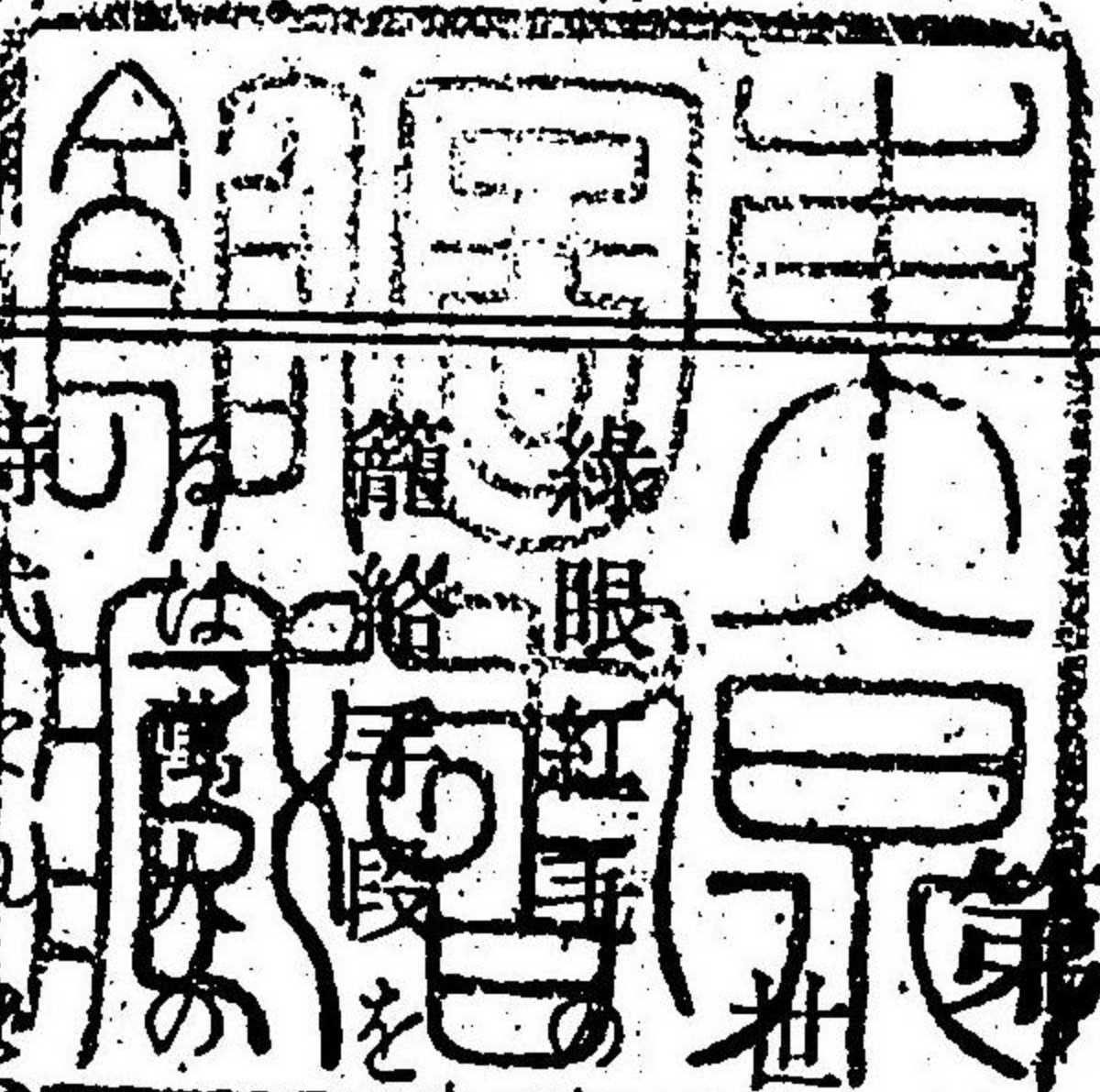
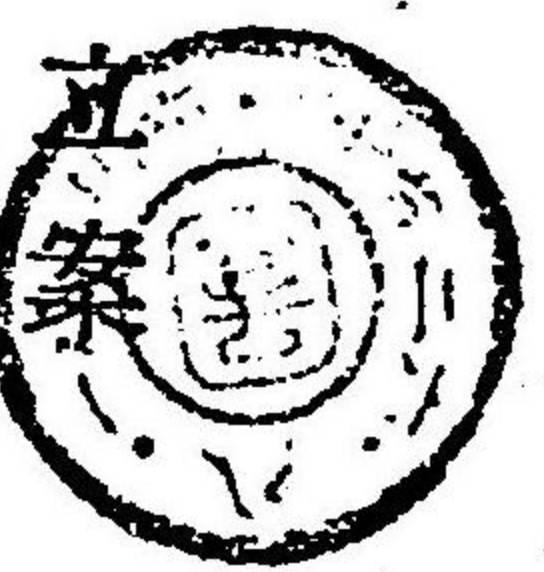
# 教旨辨惑

一名所謂衝突に就て

杉浦重剛

立案

宮崎繁吉筆記



## 第一章

世界の太勢、我國の地位と基督教

緑眼紅毛の兒が、我東洋の諸國を半開未開視去て、殆ど籠絡手段を行ひ、傍らより其土地を蠶食併吞せんとす。遍く知る所には非ざる歟、尤も弱肉強食の時代は、深く咎むべきには非れども、彼が厚顔にも、鐵面皮にも、内に毒刃を包懷して、外に博愛主義を唱へ、

世界の太勢、我國の地位と基督教



四海は皆一家と呼號し、以て東洋の民を籠絡し、然る後ち己を利し、己が版圖を擴張せんことを謀るは、此れ亦顯然たる事實の掩ふべからざるものには非ざる歟、然而て我東洋一部の人が、實際に於て所謂博愛主義が一般天下の人民間に行はるゝものなる歟、將た亦四海を一家として差支へ無き歟を探討究思する所無く、妄信にも、迷悟にも、遂に彼に籠絡せられて、喋々然、擾々然、又濫りに博愛主義を唱へ、彼か前拂となり、提灯持となりて、自ら愧る所ろ無きは、實に哀むべく、慨くべきの次第なる哉

抑も予は理窟上はサテ置き、實際上に於て、宇内の大勢

を目撃し、夙に其所謂博愛主義が、一般天下に行はるべきものに非るを知る、四海は一家に非ず、同胞に非ず、兄弟の親あるにあらざるを知る、何となれば夫の自ら博愛主義を唱へて、臂を振ふて天下に呼號する所の泰西人が、一千年來の長歲華を経て、猶ほ未だ其實を擧ぐる能はず、却て虎狼不仁の心を以て、東洋の人士に加へ、年年歳々我東洋の各土を蠶食せんことを謀りつゝ、有るは、豈又其一證には非ざる歟、凡そ父子相親み、夫婦相親み、兄弟姊妹亦相親みて、一翻の風波たも揚ぐる無きは、これ一家の美德にして、而も人間の常情とする所なれば、則ち苟も四海を以て一家となし、覆載間の人類を



以て同胞となし、兄弟となさば、唯須く相親み相愛し、宇内の各國は、悉く其干戈を銷して、以て天下泰平を謳ふべきのみ、然るを事此に出でず、博愛主義を以て自ら任ずる其人が、最も戦亂を好み、最も從軍を好み、百萬の貔貅を養ひ、千門の巨礮を鑄り、利刃林の如く、銳器山の如く、遠く三千の艤艦を従へ、來りて東亞細亞の邊海に出没し、威を朝鮮に示し、虚喝を安南に加へ、將に南洋の諸島を踐蹂し去らんとするの概有るは、其れ亦何の故ぞ哉、夫の英人が年々數百萬函の阿片を支那に輸入し、己れを利するを知て、支那人の塗炭に苦むを憐れまざるは、此れ亦何等の不道德心ぞ哉、四海を一家とすれば、支那

人愚なりと雖、亦夫の泰西の人と同胞兄弟には非る歟、苟も博愛主義を以て、天下の大義となす以上は、支那人愚なりと雖、亦宜く愛す可し、イナ愚且頑なるものを見て、通常より一層一倍の愛憐を加ふるは、是れ同胞兄弟の常情には非ざる歟、然るを自ら阿片の大毒たるを知て、倍すく之を支那に輸入するは、是れ乃ち兄として其弟を鳩殺せんとするもの也、弟として其兄を毒害せんとするもの也、然るに同列の諸國に於ても、敢て之を尤むるものなし、之を豺狼と謂はん歟、禽獸と謂ん歟、其博愛の至情は、果して何くの點に在る哉、然とも此れ皆泰西の人が我東洋に加ふるものにして、其風俗人種も



相異なる所有りて、一は博愛主義を唱へ、一は非四海一家主義を唱ふるものゝ間に起れる事實なれば未だ我が一道の議論を確認するの金城鐵壁となすには足らざれども、歐洲の各國が相互に虎視眈々として、其江山は悉く硝煙彈雨に冥濛たるを見れば、増々以て笑止千萬の至りに堪へざる也、佛蘭西城を高ふすれば、獨逸も亦壁を固ふし、獨逸馬を肥せば、佛蘭西も亦兵を練り、彈丸硝藥を造る、露國は信を佛國に通じて遙に相聲援し、英吉利は虚に乗じて佛蘭西を窺ふ誠に歐洲列國の境上は東西南北の軍の聯隊旗の翻々上下する處にして往年普佛の戰鬪の如きは、殆と言語に絶つたるものあり

て、多數無辜の生靈を殺し、枕骸野に遍く、血は萬里の草木を朱殷にし、其慘憺の狀、聞くものをして、暗然として心を傷ましめしは、それ江湖人の遍く知る所には非る歟、抑も普國の人は、白哲人種にして、而も博愛主義を執るもの也、四海を以て一家と稱するもの也、佛國の人も亦然、此の如く同じ緑眼紅毛の白哲人種にして、而も同じく博愛主義を執るものにして、而も同じく四海を以て、一家と稱するものにして、猶且此の如く憑陵たる殺氣を以て相剪屠するを、況んや其毛色を殊にし、風俗習慣まで相殊にする、白哲人種と蒙古人種が如何ぞ愛憐の情を共にするの理有らん哉、凡そ激流奔湍宇内の大



局面に迷り一朝事有るに臨んで、曲直を干戈に訴ふるは、  
數の免かる可からざる情勢なるに、我東洋一部の人が  
深く其の情勢を窮めず、たゞ雷同して子々の小理に惑  
ひ、思ひもよらぬ博愛主義を唱へ、實際上天下に行はれ  
ざる四海一家主義を執りて、遂に彼が術中に陥りて自  
ら悟らず、將に及ぼして國家を誤らんとするは、誠に以  
て淺ましき心得なる哉、

それ此の如く、泰西の人士は、實際上行はれ難きの説を  
唱へて、我東洋に進入せり、猶予の聞く所を以てすれば、  
歐洲の或政府の如きは、國庫金を出して以て布教の助  
けをなすもの有り、於是乎其布教の所以を推測する

に、固より宗教を利用して其籠絡の手段を達せんと  
の策謀たるに過ぎずして、而も其籠絡の手段を遂けたる  
後に於て、施す所有らんとするに過ぎざる也、是故に方  
今宇内の大勢は如何にと問へば、我東洋の諸國は瘴煙  
蠻雨の中に晦冥せられて、冥々の裡に我蒙古人種は彼  
の綠眼紅毛の兒に抑制せられ、恰も屋大の磐石の倒れ  
て小卵を碎かんとするが如し、吁亦危い哉、見よ南洋羣  
島の諸島は西班牙人の手に落ち、米人佛人の手に落ち、  
印度は英人の棲窟に歸し、アルタイ山北萬里の廣原は、  
露人が馬蹄の踐蹂する所となり、支那は其手足を縮め、  
安南は疲れ、朝鮮の如きも、其名は獨立國なりとは謂へ、



露支の關係漸く繁煩にして、其危機は一髮の干鈞を繋ぐが如く八道の江山も、亦應に羶腥の窟に化せんとするの兆有り、それ此の如くなれば、我東洋は、何國か此中より崛起突進して、東洋の東洋たる所以を示顯し、蒙古人種の大技倆を演ずべき歟、問はずして知る其我國と支那なるを、我國は小なりと雖、而も獨立國の題名を保持して、文運人智も亦漸に進めり、苟も護國の精神を喚起せは、其れ必ず庶幾からん歟

護國の精神とは何ぞ、別に四角張たる説も無し、唯天下の大勢に着眼し、宇内萬國の生存競争する活機に發悟したる人間の至情上、而も國民の幸福を圖らんため、其

國を守護するのみにして、亦た己むを得ざる所以のもの也、試に夫の歐洲の一大地を見ざる歟、四分五裂して蟹甲龜背の如く、唐土戰國の時代の如く、相鼎立して、負けず劣らず其境界を守護し、巖乎として動かす、中には彈丸黒子の地に割據して、以て一國を建つる丁麻克の如く和蘭の如く瑞西の如きは、外部表面より之を窺觀すれば、實に無利無益に覺ゆる、寧ろ他の大國、露也、佛也、英也、獨也、に合併し、將た又た歐洲全土の諸國は、悉く團結して一大歐羅巴國なる者を建成したらんには、自然に城樓を築き、鐵艦を造るの費用を省き、其他百般の勞力も亦隨ふて省くに至るべき也、殊に其風俗人情も、



地味氣候も、氷炭の差異無くして、同じ白哲人種なるに、猶且つ彈丸黒子の地を守りて、國民の區域を定め、江嶽林泉の境を分つて、相睨視するの勢有るは、抑も亦何の故有て然る歟、他なし、其區域内に生存氣息する所の人民の幸福は、皆な之に依憑し始て維持するを得る者なれば也、故に目今英領の印度人は、果て幾何の幸福を有する歟、米國人が獨立の戦争を起して、英人に抗敵したるも、亦其國民の幸福無きを憤怒したるの結果には非るか、凡そ人間には、其瘋癲白癡に非ざるよりは、實に一片の理屈か前後左右し能はざる一種の大感情有て、其感情は之を地味氣候の外形の情況、及び人民の習慣に

獲て、而て一種の國風を一區域内に樹てたるもの、固より一朝一夕の事に非ず、故に一人一個人が巨萬の黄金を積み、巨萬の財寶を貯ふれば、何國に棲み何の處に在て紳商紳士の資格を備へて生活するも、自儘勝手なりとは謂へ、他の事情に強迫せらるゝに非ずんば、墳墓の地に戀々して、去るに忍びざるの情實あるは、是れ乃ち此國種の大感情の然らしむる所にして、其宇内の各國が、理窟土より其感情を破碎する能はずして、互に其國境を守るも、豈亦偶然ならん哉、ステニ國有り、國有て然後ち其人民の幸福有る譯なれば、其國民が其國を守るは、乃ち自身の幸福を護る所以



にして、國家の觀念も茲より起り、往時の所謂攘夷的精神も亦茲より起るもの也、方今の白面書生、口を開き、舌を掉へは則ち往時の攘夷を譏る、宜なり西洋の文物一たび輸入してより、其弊害も實に大なりとは雖も、陸に鐵車を飛ばし、海に火艦を聯ねて、我國の理學文學も亦頗る進歩したる譯にして、不幸にも往時に在て、鎖港攘夷の實を舉たらんには遂に今日の盛運を見る能はずして已まんのみ、サラバ方今の人が盛に往時の攘夷論を譏るは、是非もなき次第なりとは謂へ、而も其攘夷の精神は、一片國を愛し、國民の幸福を謀るの赤心丹誠に出でたるものなれば、其行跡や非とすべけれども、其

志や誠に篤し、最も方今泰西の文明國と呼ばるゝ英國人も、佛國人も、露國人も、獨逸人も、其行跡にこそ現はれざるも、皆亦攘夷の精神を抱懷し、其精神は一變して外卑内尊の心に化して而て顯はる、則ち英國人が百萬函の阿片を輸出し、支那人を斃して、自國人の幸福を大にせんことを謀るも亦其精神には非ざる歟、支那の林則徐が二萬函の阿片を焚燒して、自國人の禍を變して幸福となさんことを謀りたるも、亦其精神には非ざる歟、泰西の人士が狡獪不徳の手段を以て、銳鋒を東洋の諸國に向け、普佛の兩軍が境上に決戦して、血を流し屍を積みたるも皆亦其精神には非ざる歟、凡そ國を建つる以



上は、須く是心有て、是精神有て、他國の存亡利害は其間  
 ふ所に非ず、唯我國民の幸福のみを謀るべきは、世界の  
 大勢上、理屈上、疑ふべからざるの事實にして、博愛主義  
 四海一家主義などとは、思ひもよらぬ説也、然るを獨り  
 怪む我國一部の人が、國家の急なる彼の如く、獨立建國  
 の眞面目を發表せざる可らざる彼の如く、東洋人の大  
 技倆を顯はさざる可らざる彼の如く、泰西諸國人の四海  
 一家主義を唱へて而て其實無き彼の如く否、理屈上よ  
 りも其主義が天下に行はるべきものに非ざる此の如  
 きを覺悟する所無くして、漫然博愛主義の糟糠を嘗め、  
 子々調々の少利益をなさは、以て國民の幸福を謀ると

稱して、國民の大幸福とする處と思はず、遂に我國家を  
 誤らんと欲するを、抑も亦何の心を哉、  
 予前述に於て、既に彼の所謂博愛主義か、實際上世間  
 に行なはれざることを説き、今又已に道理上よりも亦  
 世上に行はれざることを説けり、殊に方今我國の地位  
 は果して何くの點に在る歟、誠に我國は最下班とも謂  
 ふべき地位に在て、其最下班に在る所以のものは、我國  
 の江嶽林泉の不沃、湖海濱灣の不利より起れるに非ず、  
 唯其國人の或一派が、無氣膽無骨力なるより起れる所  
 以にして、予輩が常に長大嘆息する所、往時我國人が一  
 齊雷同して、一群の蟻螻の如く、西洋の臭羶を逐ふて以



來、萬般の事、皆頭を泰西の人に低れざるは莫く、之を最も卑近なる處に徴すれば、我國人が、肉を斫り、魚を燻炙し、以て泰西人に饗するものは、悉く西洋料理にして、而も一盂一盤の日本料理有る歟、我國人が彼土に赴くもの、亦一人の紈袴を穿ち、廣袖の衣褐を纏へるもの有る歟、將又泰西人が我國人に飲饗せしむる所は、悉く西洋料理にして、而も一匕一盞の日本料理有る歟、泰西人が我國人が國風の粧を成して彼土に入るを笑はゞ、我國人も亦何が故に泰西人が泰西風の衣服を着けて我土に入るを笑はざる歟、泰西人が我國人に饗せしむるに日本料理を以てする無くんば、我國人も亦奚そ泰西人

に饗せしむるに枉て西洋料理を以てするに及はん哉、彼は彼の如く其國の本色を守るに、我は此の如く其本色を守らずして、却て彼の後塵に歩するは、好奇心に出てたるに非ずして、全然彼に心酔して自ら知らざる也、殊に我國の大學を把て、之を泰西諸國の諸大學に比較せん、彼國の大學が、自ら彼國の學科を先にして、而て他國の學問を後にするものと、我國の大學が、萬事皆彼に取るものとは、其れ果て幾何も差異無き歟、抑も泰西人が昂々然として天下に豁歩し、秋毫も天下の非難を被らざる處を目して、獨立國の大本領とすれば、我國人が躋天跼地して、猶且つ笑を招く處は、則ち獨立國の大



本領に非るを知る也、且つ其主人公に向て叩頭唯諾し、以て其味の適する所を侑め、其樂みの適する所を演じ、維命是從ふは、實に奴僕の常態にして、今之を我國人と泰西人とに比すれば、多くは我國人は奴僕の列班に在て、泰西人は時に主人公の地位に立つなきかを疑がふ、さらば泰西人が主人の如く自重自尊するも、我國人は枉けて自重自尊の心を艾り、以て奴僕の如くに彼に事ふる者とせば、之を兩兩比肩して、獨立の人と謂ふは、豈又不可とする所無き歟、凡そ人間の人間たる所以は、大に其地歩を占むるに在るのみ、其地歩の最も高さ處は、則ち其眼下の人に向て誇るに足る所以にして、不然は

少しく才能識見有る人の前に臨で、青天霹靂の言論無くして、遂に其籠絡に逢ひ、其掌中に握殺せられ、以て一生を卑屈の迷雾中に送るもの也、即ち我國人が泰西人に於けるの情態は、其れ茲に庶幾からん歟、此の如く我國の地位は、天下の下班に在て、其人々は多くは常に泰西人の左右驅馳する所に甘ずる輩なれば、其名こそ、其表面こそ、東洋獨立の一國とは謂へ、其國人の精神は、實に泰西諸國の屬國の如く、鷄林八道の今日と纔かに一步の差異有るのみ、之を泰西諸國か、其名も、其表面も、其内部も、其精神も、悉く皆な巖乎として、獨立國の大本領を維持するに比較すれば、如何ぞ天淵霄壤の差異のみ



ならん哉、文運日に進むと雖、其文運は泰西人に献するの貢物と一般なるのみか、既に其精神を失却したる以上は、其形骸は無定河邊の鬮體に同じく、復奚ぞ言ふに足らん哉、抑も我國人が此の如く卑屈の淵潭に陥りたる所以のものは、或は時勢の然らしむる所も亦之れ有る可しとは謂へ、而も「己れ我が」の四字を忘却したるに由るのみ、苟も是四字を忘却すれば、其獨立自尊の精神も、亦同時に其形骸を離るゝものにして、而て其忘却の最も大なるものは、蓋し基督教徒其人歟、シヨッペンハッー氏曰く、宗教の既定義の力は、能く其良心を撲滅し、遂に又一切の人情を撲滅するに足ると、ソールダー氏も

亦た曰く、耶蘇は國家を思はずして、其教は國家の元氣を衰耗せしむと、基督教徒の牙營れる歐洲諸國にして猶且然、況や我國に於てを哉、迷信のために獨り所謂ゴツドを拜崇するのみか、萬事皆な是非を問はず、頭を泰西人に垂るゝは、我國基督教徒の自ら潔しとする所にして、殊に泰西人の如く、口舌にのみ博愛主義を唱ふるに非ず、外部にのみ四海一家主義を粧ふものに非ずして、而も其心情肝膽より湧出したるものなれば、隨て國家を思ひ、一國の獨立を謀るの觀念に乏し、故に苟も我國の地位、彼の如く最下班に在て、獨立國の大本領眞面目無きの時に臨て、増す此基督教を擴張したらんには、



我國民の良心を撲滅し、元氣を撲滅し、一切の人情を撲滅するの愈大にして、而も其地位は果て何の點に落る歟、雖然、幸に昨今に在ては、我國人も頗る年來の妖霧を排除し、天下の大勢に着眼し、宇内萬國の生存競争する活機に發悟し、國を建つる所以、國民の幸福を有する所以、我國の地位果て何くに在る歟、我國が東洋の一方に崛起して、蒙古人種の大技倆を演せざる可からざる所以、博愛主義の天下に行はるゝものに非ずして、殊に其我國に在ては、最も有害無益なる所以を悟りたる勢なれば、我國獨立の基礎を確ふするの期も、漸く近きたりと謂ふべき歟、

哀むべし博愛主義は、四海一家主義は、基督教は、之を天下の大勢に徴すれば、實際上行はれず、建國の所以のものより之を説破すれば、理窟上行はれず、我國の位置より之を言へば、決して施行す可きの主義宗教に非ず、既に實際上、理窟上、我國の位置上行はれずんば、其れ何を以て行はるゝ歟、故に予は斷乎として豫言す、曰く泰西に在てはサテ置き、我國の基督教は、自然亡滅に歸せんのみと



## 第二章

## 理學と基督教

覆載宇宙の間、果て基督教の所謂神なるもの有る歟、將又た無き歟、其神有りといひ無しといふものは、誠に妄想に出で、迷信に基縁したるものにして、確然動かざるの説には非ざる也、凡そ妄想と迷信とは、能く理學の力を以て、之を排除するを得るものなれば、千百年來の習慣に因て、其基礎根源を固めたる基督教も、目今の如く人智逐次に進み、理學次第に盛大なるに従ひて、自然衰退の兆を顯はし、遂に消滅するに至るの勢有るは、如

何に負け吝みの強き基督教信徒も、蓋し争ふ能はざる事實ならん歟

凡そ物の道理を解し、然る後之を信する、之を解信と謂ひ、心に空想を描き、其描き出したるものを信する、之を迷信と謂ふ、是故に人苟も無智無眼目にして、物の道理を解する能はざれば、空想の百魔千鬼は、一身の周圍に縈繞し、遂に墜落して迷信の徒となるもの也、故に其迷信の徒は、無智無能の婦女幼少の社會に於て、最も多く之を見るは、是れ亦其一證には非ざる歟、而も其人と雖、其智漸く進み、物の道理を解するに到らば、空想の迷霧は忽然として四散消滅し、以て日月の光明を仰くもの



也、昔者鬼神妖魔怪靈の多き、一何ぞ彼の如き哉、詩に書し、傳に書し、小説院本の類に雜出す、是れ他無し、人智の未だ進化せずして、物の道理を解する能はず、苟も事物の奇變詭譎にして、人智の達せざる所有れば、以て鬼神となし、妖魔となすの故のみ、是故に毒藥を矢鏃に注ぎ、射て虜人に中れば、虜人は則ち其傷の沸湧するに駭き、以て鬼神の致す所となしたるの事實有るには非る歟、那須野ヶ原の殺生石が、能く飛禽を落とし、走獸を斃せば、世人未だ其石の毒有るを知らざるの前に在ては、以て妖狐の崇となしたるには非ざる歟、地震の魚其尾を掉へは大陸震動し、地球は圓形のものに非ず、伊勢内海の

蜃氣樓は如何ん、天草洋上の不知火は如何ん、四谷怪談の如き、播州皿屋敷の如き、皆な傳へて以て怪事とする所は、其人智の進まざるに由れば也、故に今日の如く、理學の思想、日に隆盛なるに及べば、所謂る怪事は日に消滅して、天下復た一人の一怪談をなすもの無く、怪談は偶ま寒村避地、而も人智の未だ進まざる所に在て之を聞くのみ、是れ亦其一證には非ざる歟、それ是の如く百怪萬魔悉く息むの今日に當て、彼の空想迷信に起れる、基督教の所謂る造物主なるものは、何が故に猶ほ未だ消滅せざる哉、凡そ理學の思想、日に進歩すれば、之を應用して、宇内萬般の理を窮めんことを謀るは、理學者の



汲々然たる所にして、而も一怪事有れば、進で其理を窮め、二怪事有れば、進で其理を窮め、天下の最も怪事とする所は、理學家の最も力を費して、以て其理を採研究磨する所なれば、如何に古への所謂怪力亂神も、神變不可思議の事物も、理學の照魔鏡に照されて、進退維れ谷まり、遂に其原態を現はし、化けの皮を剥去るもの也、是故に今日に在ては、理學を根據として立教するに非ずんば、如何に高僧名衲と雖、籠絡手段を以て世人を瞞着する能はず、彼基督教の所謂造物主も、もと彼の往時の怪談と一般にして、唯其造物主の有無は、一片の空想妄信に出でたるものなれば、今日理學の力にしては之を

證明する能はず、唯今日のみには非ず、千秋萬古の後、月世界に攀登するの時期有るとも、猶且つ證明する能はざるは、余の斷乎として豫言する所なり、已に其證明を得る能はずんば、何を以て之を信する哉、空想の空想たる所以、迷信の迷信なる所以、誠に憫然の至りにして、殊に方今の天下は人智日に開發し、萬般の事物、悉く理學の説明を得て、然る後始て之を信するの勢なれば、彼造物主も亦豈消滅するの秋無からん哉、  
或人の曰く、基督教の空想迷信と、理學の推窮は、相互表裏するものなることは、既に説を聞けり、雖然、理學の最も盛なる英佛諸國は、最も空想迷信の基督教徒か窟宅



する處なるは、何の故ぞ哉と、余之に對へて曰く、然り有之、抑も泰西諸國に在て、父母の兒を生むや、宗教道德の養成は、實に呱呱の聲、遲々の歩と共に始まり、以て基督教の空氣を呼吸し、基督教の波濤に漂蕩し、其浸潤陷溺する、實に一朝一夕の事に非ず、故に其幼時の習慣は、易く拭去消除する能はずして、長く、空想迷信の深壑に墜落して、其巖崖を攀登する能はざるもの也、凡そ習慣の恐るべきは、實に江湖人の遍く知る所にして、余輩が幼少の時、幽靈怪鬼の談話を聞きて、種々雜多の妄想を起し、其妄想は悉く腦心に浸潤して、今猶其痕跡を留むるが故に今は則ち全く世上靈鬼の無さを信すと雖、而も

暗夜に墓田を過ぐるを快しとせずして、碎煙零雨荒涼の夜、古戰場を過き、斷頭臺下を横ぎりて、覺へず毛髮を立て、魂魄を消し、鬼神の前後に聚るの思を成すも、亦偶然のことに非ず、故に或人は言へり、曰く習慣は第二の天性也と、之れ有る哉、泰西の人は、既に此習慣を有せり、況んや生長の後之に配するに一層の宗教道德を以てす、父母は已に基督教徒也、兄姉は已に基督教徒也、朋友親姻も亦已に基督教徒也、其往來接伴する所の人、悉く皆な基督教徒なれば、其相誘提する所も、亦隨ふて大なる可くして、殊に各日曜日には、寺院教堂に在て、説教を聞聽するの習慣も有り、宗教の思想を繼續するの道も



有れば、自然其人民の氣風は、信用を宗教上に取りて、裁判所にまで宣誓式を行ふの習慣有るを見る、其社會組織上の基礎根源此の如くなるを以て、基督教の勢力は、實に破竹の如く、其國民か、習慣を化して天性となし、空想迷信、未來を説いて自ら怪まざるも、亦偶然のことならん哉、故に偶々大學者大具眼家有て、學理上より基督教を非難攻撃し、或は疑問を起す有らば、彼の儒家者流が口を極めて老莊虛無の學を排斥すると一般、其一國の輿論は、之を目して不道德の人と謂ひ、呼て基督教の賊と謂ふて、以て其人の信用を毀ち、百般の事業上、其才能を施すに於て、一大障害を招き、流離轉軻の境に零落

して、遂に其宿志を達するに能はず、空く黃泉の下に朽るは、猶ほ周の末代、權謀術數の盛なるに當りて、孟子仁義の説を成して、遂に行路に老ひ、荀卿道を論して、蘭陵に廢死するか如くなれば、有學具眼の人も、自ら世上の信用を失して、才の施すに處無からんことを憂ひ、遂に所謂一國の輿論、のために壓制せられて、不本意ながら基督教徒となるもの也、或又た居然たる理學家其人にして、第二の天性に基き、基督教の精神を保守するものも亦有之、然も其理學と基督教との競争衝突は、其源を數百年の昔時に發し、理學の思想愈々大なるに隨ふて、基督教は



漸く其威勢を失へり、否な其迷信の教徒が日に消滅に歸するは、復た疑ひを容れざる所にして、現に理學の勢力に匹敵する能はざるを悟り、基督教中、ユニテリアンの一派を生じて、同派の信徒が、單に古書のみを依頼せずして、今日日新の理學上、其説を確實穩切ならしむる所を目撃するも、亦其一證には非ざる歟。抑も基督教の所謂造物主なるものは、始め猶太人の空想に出で、眞誠の學理に據るものに非ざるが故に、之を攻撃非難する徒は、誠に其最も流行する所の泰西諸國より起りて、其牙城に吶喊するに至れるもの也。猶ほ予の聞見する所を以てすれば、其寺院に參詣する人は、

概ね皆婦女幼少にして、苟も天地の物理を悟解消釋し、萬卷の圖書を讀破したる學者仲間の人は、或は基督教徒の名號こそ、輿論の壓制のため之を有するも、而も其寺院に往復して、迷信妄想深き牧師の説教を聞くものは、曉天の星影も啻らずと、是れ其基督の教旨が、其學者仲間の固執する學理に違背せる所有るを確信するに非ざるよりは、安ぞ能く此に至らん哉。况や現今に在ては、佛教信徒の頗る輩出して、一半の學者は、其教義が其學理に違背する處の稀なるを感ずるは、是亦事實の掩ふへからざるものには非ざる歟。最も歐洲全土の文物は、もと東洋より飛播したるものにして、誠に歐洲全



土の名説理金言とするものを把て、希臘の古典に比較すれば、殆ど符節を合するが如くにして、又希臘の古典と佛書とを並讀すれば、相類似せる處多きも、亦以て思半に過くべく、其學理の其佛教に違背する處稀なるは、理の當然のこと而已、夫れ是の如くなれば、泰西の諸國は、基督教の勢力、日に理學のために減縮壓倒せられて、憫然の至りにも敗北の色を呈せり、其落武者の輩が遠く東洋の諸國に逃遁して、別乾坤を開かんと欲すと雖、我日本國の如きは、理學の八陣愈々嚴密にして、幼童小兒の輩まで盛に理學の探窮に汲々たる勢、殊に宇内の大勢を明らかにし、國體の至尊至嚴なる所以を思ひ、相

互に聲援する勢有れば、如何に落武者輩か、死力を盡して各處に轉戦すと雖、而も固とこれ根無きの一孤軍なれば、螳螂の斧を奮て車轍に向ひ、疲兵殘黨が半日の糧を裏みて、萬里の遠道を涉り、鈍刀破器を以て、雲霞の大軍に抗敵すると一般、一二の輩が哨兵線上に潜入するは、或は之れ有るべしと雖、而も全勝を全國に期し、其威勢を六十餘州に磅礴せしむるを得ること、復かの理學の未だ進歩せざる泰西諸國の昔時の如くならざるは、蓋し江湖人の遍く信する所、豈又恐るゝに足らん哉、余故に曰く、現今に在ては、理學を根據として立教するに非ずんば、我國一般に布教する能はざる也と、而て予



が平生理學宗を主唱して、之を天下一般に擴張せんと欲する所以も亦實に此に在り、凡そ理學と謂へば、世人往々之を誤解するもの有て、單一に理窟に偏黨して、秋毫も感情に注意せざるものゝ如く看做すれとも、是れ最も非也邪也、易に曰く、窮理、盡性、以至乎命と、誠に窮理盡性は實用の學にして、相互對峙して、然る後治道自ら立ち、太平も亦自ら開く、もし理のみに偏して、其性情を盡す能はず、乃ち今日の人を治め、今日の太平を致す能はずんは、如何に天を談するの妙に、鬼神を泣かしむるの壯有りと雖、遂に益無くして、之を空理空論と謂ふ、彼の基督教の所謂る造物主は、もと妄想の空理に出て、其

所謂る博愛主義も亦妄想の空理に出でたるものなれば、泰西に在てすら猶且つ今日の事實に適せずして、殊に我國に在ては、最も其人情國體に戻る、其天下に容れられざるは、單に空理のみを窮めて、秋毫も性情を盡さざるの致す所なれば、余亦豈に是の如きの空想を抱かんや、豈又基督教を譏りて自ら基督教の二舞をなすものならん哉、抑も余が所謂る理學宗は夫の基督教の妄想に描ける一片の空理と、大に其趣を異にし、最も意を性情に盡せるもの也、是れ余が十年來屢々新聞雜誌に論說する所なれば、江湖人も亦恐らくは之を知らん、故に茲に贅せずと雖、而も人事も亦物理學の定則と相戾



悖する所無しとの一言は、其れ我所謂る理學宗の大旨を盡せるに庶幾からん歟

### 第三章

#### 國體、國情と基督教

我 天皇は天の如く日月の如くにして、寶算萬々歳、寶祚萬歳の後に聯綿して天地と窮る所無く、其至尊なること姓の稱すべきなれば、之を 天子と謂ひ、之を 天孫と謂ひ、之を 日の御子と謂ふて、彼の姫と呼ひ、羸と呼び、劉と呼び、李と呼び、ルイと呼び、ナポレオンと呼び、以て代々其姓を異にするものと、如何ぞ又同日の論ならん哉、是れ誠に萬國の極宗、大經の源本にして、普天の下、率土の濱、何處か其鴻澤を仰、賛欽慕せざらん



哉、故に其國は忠魂義魄の磅礴する所にして、其民は皆  
 な忠誠義烈の人のみ、詔勅のある所は、其民の赴むく  
 處、生也、死也、唯 詔勅に隨ひて、敢て貳心あること無き  
 は、之を歴代の國乗に徵するも、亦た以て知るべくして、  
 亂臣賊子の未だ曾て 寶祚を窺窺せることなきも、亦  
 其一證には非ざる歟、道鏡將門の輩ありと雖、藤原氏の  
 專横を憤り、君寵過度の喜悅に狂するのみ、清盛の專横、  
 頼朝の跋扈、何を欲して成らざらん哉、何を求めて獲ざ  
 らん哉、而て皆亦人臣の分に安し、足利尊氏の無道を以  
 て、猶且つ征夷大將軍の職を得んことを願ひ、至尊を擁  
 戴して天下に號令するに過ぎざるのみ、是れ蓋し尊王

の精神、國民の腦裏に磅礴して復た洗滌する能はず、大  
 義名分の確乎として犯すべからざるもの有るに非ず  
 んば、安ぞ能く此に至らん哉、然るを方今弱冠の徒は、舌  
 を掉せは則ち曰く、天下は一人の天下に非ず、天下は天  
 下の天下也、米佛の合衆以て國を建るか如きは、これ乃  
 ち天理に協ふもの也と、吁、是れ何ぞや、理窟上は兎も角  
 も、彼の禪讓放伐を以て國を建てたる、支那及び泰西の  
 諸國はイザ知らず、苟も萬世一系の 皇室を奉戴する  
 日本帝國の如きは、決してかゝる譯有るものには非ざ  
 る也、

夫れ是の如く建國數千年、君は君、臣は臣、其君臣の大義



名分を反覆せざる我國は、實に其國民の心膽氣魄も、亦た一種別格の品位を有して、殊に其精忠義烈の精神は、鬼斧鬼鉞も剪斷すべきに非ざれば、中古佛教の全國に蔓延して、上下貴賤の別無く、公卿大夫士庶人の段無く、深く人心に浸潤して、十萬の伽藍は各地に巍峨とし、百萬の僧侶は熱心なる勉勵を以て門徒を誘導したるの事實有りと雖、遂に天下の大勢を左右するの勢力無くして而て已み、支那文物の輸入も、或は多少の變化を致せりと雖、而も亦た其大局面に到りては、遂に少しくも移遷變動する所無くして已む、獨り我國の大局部を移遷せざるのみか、却て大に我國進歩の助援をなしたる

は、蓋し事實の掩ふべからざるものには非ざる歟、抑も余少時孔孟の圖籍を讀み、心私に其立教の我國体に戻悖する處有りて、而て其我國に輸入して、深害大禍を醸さざりしを怪む

仲虺之詰曰、惟天生聰明、時人有夏昏德、民墜塗炭、天乃錫王勇智、表正萬邦、纘禹舊服、竝率厥典、奉若天命、夏王過罪、矯誣上天、以布命于下、帝用不減、式商受命、用爽厥師

泰誓曰、商罪貫盈、天命誅之、予弗順天、厥罪惟鈞  
大雅曰、有命自天、命此文王、于周于京、纘女維莘、長子惟行、篤生武王、保右命爾、變伐大商



易革象曰湯武革命順于天而應乎人

泰誓曰皇天震怒命我文考肅將天威

又曰爾其孜孜奉我一人恭行天罰

武成曰商王受无道暴殄天物害虐丞民爲天下逋逃主

萃淵數予小子已獲仁人敢祇上帝以遏亂略華夏蠻貊

罔不率俾恭天成命

孟子曰賊仁者謂之賊賊義者謂之殘殘賊之人謂之一

夫聞誅一夫紂矣未聞弑君也

商書に曰く夏王周書に曰く殷王然則ち桀紂も亦

其君に非ずして果て何ぞ哉湯也武也已に懷くも

のは之を矜み己に背くものは之を伐ち遂に彼に

歸せざる無きに至りて然る後君を放ち君を弑し

て天の命する所と謂ひ而に君に非ずして而て一

夫獨夫と謂ふ其言行並に大逆無道にして之を我

國民の君勅にこれ従ひ君は君たらざるも臣は臣

道を盡して秋毫も君の徳不徳を病まざるに比較

すれば其差異果て幾何ぞ耶

孟子曰以力假仁者霸霸必有天國以德行仁者王王不

待大湯以七十里文王以百里

是れ勸むるに仁を以て天下を亂たすものには非

ざる歟

樂記曰王者功成作樂



其功成ると謂ふものは篡位放弒、君臣反覆のことのみ、益稷云、簫韶九成、鳳凰來儀、周語云、周之興也、鶯鶯鳴乎岐と、抑も鳳凰は篡位の樂を聞かんと欲して來れるものなる歟、鶯鶯は豫め弒逆の隱を知りて鳴くものなる歟、並にこれ妖鳥の最にして、我有道の國に之を見ざるも亦宜べなる哉、

孟子曰、地方百里而可以王、王如施仁政於民、省刑罰、薄稅歛、深耕易耨、壯者以暇日修其孝弟忠信、入以事其父兄、出以事其長上、可使制挺以撻秦楚之堅甲利兵、彼奪其民時、使不得耕耨以養其父母、父母凍餓、兄弟妻子離散、彼陷溺其民、王往而征之、夫誰與王敵、故曰仁者無敵、

王請勿疑

これ其仁を説く、之に代ふるに甲兵劍戟を以てす、何ぞ其虚妄の甚しき耶

又曰、三代之得天下也以仁、其失天下也以不仁

又曰、國君好仁、天下無敵焉、南面而征、北狄怨、東面而征、西夷怨、曰奚爲後我、武王之伐殷也、革車三百輛、虎賁三千人、王曰無畏、寧爾也、非敵百姓也、若崩厥角稽首

其仁義を説く、是の如く湯武の天下を獲るを以て稱首となす、若し湯武仁義を以て天下を獲る能はざれば、則ち仁義は天下に施行す可からざる歟、臣子にして其君父に事仕するは、則ち仁義の地にし



て、其君父を除て仁義を説くは、猶ほ虎狼も亦是れ  
らと謂ふが如きのみ、

抑も孔孟の教は、三代の興るを以てするものにして、而  
も三代の興るは所謂る聖徳なるものを以てするもの、  
其位を篡し、其主君を放弑し、然る後君臣を正し、父子を  
親し、夫婦を和し、兄弟を睦するのみ、其仁義と謂ひ、道德  
と謂ひ、禮樂と謂ふの名目が、美麗にして而も珠璣錦綉  
の如くなれば、後世の人深く之を察せずと雖、而も之を  
我國の仁義道德の實を備へて、君臣相頼み、皇統の聯  
綿として千秋萬古に傳るに比ぶれば、豈又天淵霄壤の  
差異のみならん哉、夫れ孔孟の教を立つる是の如くな

れば、後世其教を奉するもの、安ぞ禪讓放伐を事とせざ  
らん哉、且つ人間には一般に慾心なるもの有れば、後世  
の人、其堯舜の禪讓か、己に不利なるを以て、徒に之を大  
公と稱して、復た一人の之に倣ふ無くして、而も湯武の  
放伐が、最も己に利なるを以て、強て權道と號して、以て  
悉く之に倣ふ、於是歟則ち知る、今來古往同じく君位を  
篡して、其行の巧なるものは、之を仁君と稱し、拙なるも  
のは、之を亂臣と謂ひ、其仁君と亂臣とは、則ち其行の巧  
拙を謂ふのみなるを、是故に試に支那の國乗を繙て、其  
今古の興亡成敗を探窮するに、其君の不徳なるに及は  
ず、少しく聖徳有るものは、臣子夷蠻の分無く、師を興し



て輦轂を蹂躪し、天下の蒼生を安ずるを以て名となし、君を放ち、位を篡ひ、自立して皇帝天子と號して自ら怪まず、民も亦威な之を習慣として自ら恠まず、故に周は二十七世にして亡び、秦は二世にして亡び、漢は前後二十三世にして亡び、鼎立して三國となり、晉となり、六朝となり、唐となり、五代となり、宋元明清となりて、君臣の反覆定位無く、天降て地に化し、地昇て天に化し、山嶽溪に化し、溪潭陵に化して、五帝の胄裔は身を容るゝの室無く、三王の兒孫は足を跂するの處無く、九鼎俎豆は軍卒の饌器にして、宗廟社稷は將帥の陣營、吁亦淺間敷次第には非ざる歟、試に思へ、我國今日に在て、道德と曰ひ、

禮樂と曰ひ、忠信孝悌と曰ひ、以て萬人の行ふ所、萬人の貴ふ所の名目は、悉く支那國より渡來せるものには非ざる歟、我國の學問、我國の道德の師傅とも稱すべき國柄が、忠孝義烈の跡を論するに汲々乎として、而て忠臣孝子義烈人の出る最も稀に、却て亂臣賊夫の踵を接して起り、弒逆公行するは、意ふに其名實相稱はざる立教が、遂に其國体を成したるが故のみ、然も予は悉く儒教を以て邪道とするものには非ざる也、其經書史乘に於て、盛に善行美德を論說するは、實に以て天下の稀にする所と謂ふべき歟、而て我國は其學風の餘流を汲みたるものなれば、彼國にして、彼の如く弒逆公行せば、我も



亦應に之に傾くべきは、勢の免れざる所なるに、其勢茲に出でずして、却て我國固有の道德を固めたり、動もすれば一跬一步の差より稍大義名分を誤りて、基經は廢立を謀り、徂徠は東夷自ら居るが如きこと有り、雖、而も天子の尊きを知りて、自ら天子と僭號し、民を安ずるを名として、以て弑逆の無道を行ふが如きことは非ざる也、是れ皆な其中古支那文物を輸入するの際、其我國の氣風に適するものを取りて、其適せざるものを取らざるの致す所なると、我國人が一種別格の大品位を有するとに由るに非ずんば、安ぞ能く是の如くならん哉、殊に徳川の末世、儒教の盛なる彼の如くにして、各藩の

諸學は、能く其學問の正邪を取捨して、以て其學規を定む、今其一二を舉ぐれば

福岡修猷館學則の一條に曰く、國俗に戻り、萬づ唐めきたる事を好み被申間敷候

島津公が鹿兒島造士館に訓令せる條中に曰く、三綱五常の本領を守り、義理を明らるにし、名分を正し、各祖宗を敬崇し、生國のために道を開き候義天理自然の本意に候處、當時儒者と唱候中には我皇朝をも夷狄同様に心得違ひ、古典は勿論、律令格式、または六國史以下に至り候ても、不辨別のもの有之候半歟、孔子の道にも協はず、第一 天照皇太神



の御明慮も可畏儀にて、右等の處、一同深く心得、分  
學風令振起、追々國用に相立候様、宜有工夫儀、專要  
に候

夫れ是の如くなれば、其子弟の其館下に生長するもの  
は、皆な大義名分を明かにし、遂に王政復古の偉業を奏  
したるも、亦偶然には非ず、豈又思はざるべけん哉  
然而て明治維新以還は、則ち樸實篤厚の美風を破滅し  
て、虚耀好奇の弊習を促かし、其實行を務めずして、徒ら  
に其体裁を飾り、國民元氣の盛衰を論せずして、漫に彫  
蟲篆刻の末技に赴むく、學制制度も亦た頽れたりと謂  
ふべき哉、余今其然る所以を察するに、今を距る凡そ三

百有餘年の往時に在て、我國は泰西諸國と多少の關係  
を生ぜしも、固より文運進化の度、猶未た今日の高さに  
在らずして、理學の効用も亦未だ四海の人心を動かす  
に足らざれば、我國人の心を動かすことも亦隨ふて少  
々なりき、其後泰西諸國は、實に空前絶後の大進歩を演  
じて、蒸氣電機の發明は、世に縮地袖海の術を示し、遂に  
世人をして距離の考へを捨て、時間の考へを専らに  
せしむ、其結果は東洋の一建國たる我國の如きも、亦た  
已に泰西各國の間に立つの想を起したるにはあらず  
る歟、抑も我國は往時より多少の文物の存する有れば、  
今般輸入したる西洋の新原素は、中古に在て支那文物



の輸入せる時と、頗る其情勢を殊にして、一時皆な擧て舊を守り、新に抗して、最も西洋の文物を擯排し終る、然も其一旦覺る所有りて、西洋の新原素を祖述するに及では、忽然として一大反動を起し、百事皆な泰西に則り、遂に目今の如き一大奇觀を呈するに到る、凡そ西洋と謂へば、牛、馬、勃、敗、鼓の皮に至るまで、悉くメツキの品物と思ふて、上下貴賤一般に西洋の直譯に之れ從事して、西洋人の自ら陋風とする所も、猶且つ公然之に摸擬して自ら怪まず、彼の狡猾なる泰西人は、我國人が是の如くなるを見れば、心私に其物産を販賣するの道を開き、實利を收穫するの好機に應じたるを悦び、以謂らく

奇賈居くべしと、乃ち愈々煽動して以て其賞賛を吝まざる也、我國人は則ち小識淺見豆の如くにして、其陽賛に逢へば、忽ち悦喜となり、忽ち得意となりて、心に其毛髮の紅ならずして、眼眸の碧綠ならざるを憾み、其精神氣膽まで泰西人に變するに非らずんば満足せざるの勢を成せり、誠に思はざる歟、今泰西の人をして、我が國の往時の如くに、彼が紅毛赤髮を長はして、ナヨンマゲを結はしめ、廣袖緩帶せしめ、草鞋を穿ち、木履を踏ましめ、以て十字の街頭に散歩せしめは、コレヨソ所謂る人三化七にして、市井の童兒も亦必ず絶倒噴飯せんのみ、サヲハ我國人か、一も二も無く、泰西人が自ら下風とす



る處まで、之を泰西に取りて自ら誇る所は、泰西人の心に抱腹する所にして、往々渡來の泰西人が之を警省する有るも、亦其一証には非ざる歟、我國の風潮スデニ是の如くなれば、我國の大綱とも稱すべき教育事業も、亦た皆な泰西に則り、虛文の末に趨りて、實力の養ふべきを知らず、我國固有の仁義道德は蕩然地を掃ひて、忠誠義烈の精神漸く消滅し、而も皇室を輕侮するの念慮起りて、佛國の革命、露國の虛無黨を以て文明の現状とするものも亦或は有之、此れ皆な一は従前の反動心に出で、一は西洋文物の華耀に惑眩するに出でたるものにして、我國の進路は其れ果して斯の如くにして、秋毫

も國体上に差支へ無き歟、將亦た國民の幸福をも永遠に維持するを得る歟、予は斷乎として曰く、我國体を破毀するの兆にして、而も國民の大幸福を失ふ所以のもの也と、夫れ我國体の變化は、佛教のために非ず、儒教のために非ず、幾千年を経たる今日に在て、遂に西洋文物のために左右せられんとは、豈亦慨かはしからず耶、凡そ其國体の其國民の幸福と、一大關係を有することは、今日歐洲各國の大勢を目撃して、猶且つ一目瞭然たれば、我國進路の方向も、須く彼の支那文物の輸入したる昔時と一般、取るべきを取りて、捨つべきを捨て、以て我國体を誤まらざらんことを期せずんば、何を以て國民



の幸福を護らん哉

夫れ天下の大勢より之を視れば、博愛主義は其實舉がらざるには非る歟、理學上よりは愈其論據を縮むるには非る歟、其牙城たる泰西諸國の人すら、今は則ち其非を鳴らすには非ざる歟、是の如く日に其勢力を消滅するの基督教が、如何ぞ我國一般に普及するの理有らん哉、もし不幸にして、我國今日の人情が悉く西洋熱に浮かされて、制度文物一も淘汰する所無くして、悉く之を彼に取り、以て我國体を誤らんとするの時に臨で、基督教が、能く全國に擴かる有らば、此れ火を茅蓬の家に放つて、北風の其火勢を煽き、破船の將に沈没せんとする

に臨で、層瀾怒濤の山を成して來ると一般、我國体上に如何なる影響を及ぼすへきや、江湖の人も亦思はざるべけん哉、然も昨今は頗る國家の觀念の人々の心に浮たる勢なれば、基督教は愈々入り難くして、志士の少しく愁眉を披く處



## 第四章

## 所謂る教育と基督教の衝突

基督教の教、如何ぞ悉く國情に戻り、風俗を害するもの、みならん哉、余曾てバイブルを讀み、以て之を知る、其教も亦頗る長老を敬ひ、幼少を撫で、朋友のため、其身を捐て、父母に孝に、君主に忠なるの、最も神旨に協へるを説くを、凡そ夫婦相親み、父子相依り、朋友相信じ、兄弟相愛するは、宇内人類自然の一大道理なれば、我勅語の所謂る爾臣民、父母ニ孝ニ、兄弟ニ友ニ、夫婦相和シ、朋友相信シ、恭儉己ヲ持シ、博愛衆ニ及ボシ、も、基督教の説く

所の仁義孝悌も、復た一髮たも相差異する所無くして、我國は固より彼の基督教も亦人を殺戮し、人の財貨を掠め、淫姦を事とする盜賊邪惡の人を推て、ヨモヤ善人とは謂はざる可き也、抑も衝突なるものは、相互差異する所有て、其間一髮たも相譲らざるより、始て其觀を呈するものなれば、今其東西説く所の事が、是の如く等同にして、而も符節を合するが、如くなる以上は、何の國に在て之を説く、何の處に在て之を論ずるも、遂に相衝突する所無きものなれば、方今世上の一問題たる教育と基督教の衝突なるものは、其れ何くの點に在て起れる歟



近來往々 皇室に對する不敬事件の、基督教徒間に崛起するは、夫の所謂衝突の張本には非ざる歟、凡そ我國の建國は、皇室を以て原本とすれば、其至尊至嚴にして、移動せざるを、峯乎たる泰山の如く、勅語の奉戴服膺せざる可からざるは國民の分也、故に天下に如何なるもの有りとするも、異國の人に非ざるよりは、國民臣子の分として、之を勅語に違背し、皇室の尊嚴を犯して施行す可からざるは、萬人の遍く知る所、殊に我國には、已に一國の大綱たる憲法も有れば、決して其範圍を脱出す可からざるは、三尺の童子も亦能く知る所、然るをかの基督教徒が、子子の迷理に迷ふて、大膽不敵の至

りにも、勅語に違背し、以て 皇室の威嚴を犯す、抑亦何の心を哉、意ふに是乃ち其衝突を來す所以には非ざる歟、基督教徒は或は口を藉ひて、バイブル中にも亦元首の尊敬すべきを説きつゝ有れば、予輩信徒豈獨何の心か神旨に負かん、余輩固より我文武なる 天皇陛下の恩澤に沐浴するものなれば、如何ぞ我至尊至嚴なる 皇室を無にし、以て 勅語に違背するものならん哉と曰ふと雖、其基督教徒は、果て如何なる主義を執て我國に布教し、以て我國民を感化せんと欲する歟、かの所謂ゴッドと耶蘇を信奉するのみにして、我國の國体上最も尊敬すべき皇祖皇宗の靈、併に 皇室を外にす



るにや、將又た第一に 皇室を尊敬して、而後其所謂る  
 ゴツドと耶蘇とを信奉するにや、余今其基督教徒の心  
 情を推視するに、其上に事ふる所以のものは、直に其上  
 に事ふるに非ずして、其上を以て所謂るゴツドの命す  
 る所となして之に事ふるもの、乃ちゴツドに服従する  
 而已、故にもし其上を以て所謂るゴツドの命する所に  
 非ずとすれば、<sup>敬</sup>釋攘放伐も亦甘じて自ら之をなさん、夫  
 れ是の如く其上に事ふる所以が、皇室の至尊至嚴を  
 思ふの大至誠に出でたるものに非ざれば、隨ふて 皇  
 室を輕侮するの念慮を惹起す、其屢其間に在て、汚臭斑  
 穢の言行を聞見し、而も天下の大元帥たる 天皇陛下

の御眞影を以て、一片の斷紙となし、以て其敬禮を拒む  
 が如き、大不敬事件の起るは、豈亦た其一證には非ざる  
 歟、抑も 御眞影の一幅の畫像たること、勅語の一片  
 の文書たることは、三尺の童子も亦能く之を知る、雖然  
 これ余輩臣民が、宇内の至尊至嚴として尊敬す可き、  
 天皇陛下の御眞影なれば、之を夫の江山林泉、各地名所  
 の小影圖卷と同一視するは、素より臣民の臣民たる所  
 以の大至情には非ざる也、古人が伊勢御大廟に謁した  
 る歌に曰く、「何事のおはしますかは知らねども、辱けな  
 さに涙こはる」と、此れ誠に我國人が無垢純粹の至情  
 を吐露したるものにして、苟も一片の理窟より論し去



らば、事狂に近し、何となれば、伊勢の御大廟も、一家屋たるに相違無くして、漁家蟹舎を見て、涙を流さざれば、御大廟の前にも亦涙は流るゝこと無き筈なるに、其覺へず涙下る所以のものは、心恍然として其君の恩澤を思ひ、随ふて其君の君の恩澤を思ひ、又其君の君の君の恩澤を思ひ、幾千年の大古に遡りて、皇室の御宗祖の恩澤が、漫々として四海に漲り、我祖先が其中に沐浴せる所以を思ひ、一片の至情、心淵に氾濫して、汪然涕を出すもの、彼の基督教徒が、偶像を拜するを憎むと曰ふて、猶且つ自ら十字架に向て叩頭百拜するも、亦其情茲に出るに由るには非ざる歟、其十字架が、所謂る耶蘇の磔

殺せられたる所なるの故を以て、之を祭らば、何ぞ御眞影は、我一天萬乗の君、而も余輩臣民に在ては、高山大海の御恩澤有る。天皇陛下の御眞影なるが故に、之を尊敬せざる歟、イナ是の如く言ふは、必竟其大不敬事件の出る所以にして、苟も余輩臣民が、陛下の御眞影を拜せば、所謂る「何事のおはしますかは」の大至情か、胸中に磅礴して、覺へず頭を垂るゝは、則ち人間の人間たる所以にして、此至情有てこそ、始めて物を憐み事を憫むの心も起り、國を憂ふるの心も起り、博く人を愛するの心も起るものなれ、然るを彼の基督教徒が、既に此の大至情無くして、人の攻撃するに遇へば、則ちバイブル中



二三の語を引用して、孰か又た 皇室を敬せざらん哉と曰ふ、由是之を見れば、彼が近來往々 皇室を説く所以のもの、勅語のために、其立脚の地を失はんことを恐れて、其言以て其表面を粧ふに過ぎざるを知る、又其博愛の源泉たる此大至情無くして、徒に博愛主義を唱張する所を見れば、彼輩が博愛主義も、亦心より之を信するに非ざるを知るべき歟、其言行の一致せずして、而も基督教旨の實舉がらざるも亦宜なる哉、基督教徒の一部は則ち曰く、余輩誠に 皇室の尊敬すべきを知る、彼の不敬事件の如きは、基督教の徒四萬人中の一分子、かゝる小數を擧げて、基督教の全豹を非認

するは不可也と、設へ四萬人中の一分子にもせよ、皇室に對するの大不敬事件には非ざる歟、君王を無にするの罪は恕すべきに非ず、鼓を鳴らして攻めて可也、聞く昔者軍法を守り、涙を揮て名將を斬りしこと有り、是の如くにして、始て事皆公明正大に、毫も偏頗の心無くして、亦た他人の喙を容るゝ處無し、もし彼の基督教徒にして、眞に 皇室を敬し、國体を重するの精神有らば、何が故に其區々たる私情を捐て、其不敬の言行をなしたる妄戾の人を、四萬人以外に放逐せざる、今は則ち輕々看過するのみか、強て之が辨護を試むるが如きは、抑も亦た何の心ぞ哉、此乃ち其 皇室を無にするの基



督教、國体を蹂躪するの基督教たるを看破するに足  
 るに餘り有て、而て其大不敬事件の踵を接して起る所  
 以、博愛主義を濫用する所以なるか、我輩は之を口にこ  
 そせざれ、君を愛し、國を愛し、親を愛し、然る後四海の人  
 を愛するは、實に博愛の博愛なる所以にして、之を彼の  
 基督教徒の所謂る博愛に比較すれば、其優劣果て幾何  
 ぞ、語を寄す四萬餘人基督教徒エ、須らく愛の秩序を知  
 る可し、墨子の兼愛に流るゝ勿れ、其仁を民に行はんよ  
 りは、寧ろ其の君に行へ、其の民を愛せんより、寧ろ其君  
 を愛せよ、其君に事ふる忠愛にして、而て其民に不仁不  
 愛なるものは、未だ嘗て之れ有らざる也、苟も其民を仁

愛するを以て名となさは、誰か又た 皇室の威嚴を犯  
 さざらん哉、

吁嗟我國は既に 皇室を以て其國を建てたり、故に夫  
 の基督教徒が、其 皇室を尊敬するの至情に薄きは、則  
 ち以て其愛國の至情も、亦自然薄きを龜卜するに足る  
 なり、教徒或は曰く、ゴツドは眞に余か生を斯に賦せし  
 めたるか、故に、余は實に我國を愛して、紅毛綠眼の兒に  
 諂媚せざる也と、天晴れ生を我君子の國に稟けたる大  
 男兒程有て、余も其日本魂の未だ全く消滅せずして、耿  
 然星の如きもの、猶ほ存する有るを欣ふと雖、而も是  
 の如き論を成すものは、必竟未だ基督教の大面目を知



らさる人、而も、纔かに其段階を攀ちたる輩のみ、もし眞に能く其教旨を咀嚼すれば、其迷たる愈深ふして、惡も亦以て善とするに至る、方今堂々たる學者先生が、一基督教迷信のために、國禁を脱して、厚顔不徳義心にも、國土を賣買して自ら怪まざるは抑も何ぞ哉、余の聞く所に由れば、某基督教派の學校の如きは、其設置地たる、今や泰西人の所有に歸して、始め其賣買の國禁に關するの故を以て、或る有力の人が之を媒介し、其名姓を貸し、以て泰西人の有に歸せしめたりと、モシ此事をして、獠狻なる二三の商人間に成らしめば、深く怪むに足らずと雖、而も天下の人心を善化せんと欲する泰西派遣の

牧師其人が、一大規律を以て子弟教育を施すの學校に於て、此獠狻手段を行ふとは、抑も亦何たる不徳義心ぞ哉、綠眼紅毛の兒が、跳梁跋扈して、他人を害し、以て自己を利せんことを謀るは一日に非ざれば、設へ感化以て自ら任する牧師其人も、亦此獠狻手段を行ふは、深く怪むに足らずと雖、而も大日本帝國の土に生れて、其粟を食ひ、其水を飲み、其靈氣に呼吸し、有徳を以て自ら任じ、有才有學を以て後進に推さる、學者先生其人が、一言の其不徳義なる牧師の所行を責むる無くして、却て之に媚ひ、之か提灯持となり、以て犯す可からざるの國禁を犯して、土地賣買の媒介を謀り、猶鐵面皮にも其校庠



に昇て、基督の布教を謀る、其自ら欺き人を欺くも亦太甚たし、かの基督教旨中三たび意をいたせる「欺く勿れ」の實果て何くの點に在る歟、唯其國禁を犯すの巧なるが故に、其證跡判然せりと雖、之を罪する能はず、雖然徳義の罪人たるは疑無くして、法律の網羅は、幸に之を脱するを得るも、基督教徒が平生口角にする徳義の鞭笞は、屢其頭上に來らん、誠に意はさりき、基督教徒が能く人を欺き、國を欺くを好で、遂には其第一に信奉する所の神旨までも欺かんとは、抑も天下の人悉く基督教を迷信し、其窮極する所、此の如く欺を好て愛國心を忘却するに至らば、北境も、西門も、富嶽の奇靈も、琵琶湖の神秀

も、都門十萬の人家も、一賣買のために、悉く綠眼紅毛兒の手に落ち、鐵艦巨礮の銳も、遂に施す能はざるに至らん、我四千萬人の幸福は何を以て之を守る哉、一念此に至らば、毛髮悚然として自ら立つ  
抑も余が此の如く基督教に就て慮る所以は、基督教其物を懼るゝに非らず、唯其教が泰西の強國に行はれて、而も其強國人が、銳意に之を我國に傳播せんとするを懼るゝのみ、もしかの野蠻未開の亞弗利加人か、虛弱の安南人か、朝鮮人か、我國に來て、如何に惟一眞神の説をなすも、余輩は之を一小兒戯に比視すると雖、其強國の威を以て、中に禍心を包藏し、錢財人に啗はせて其慾



を逞ふせんとするに至ては、其害たる豺狼虎鯨の如く、予輩は彼が一舉一動を聞見する毎に、最も金甌の缺けんことを懼る、雖然其恐るゝに足らざるものも亦た有之、如何となれば我國に於ける萬般の運動は、一寸一步も皇室の藩圍を脱しては、遂に其心を達するものにて非ずして、今は則ち彼の基督教徒が、其所謂のゴツドを取て、之を皇室の上に加へ、以て脱すべからざるの勅語を脱せんと欲するか故に、而も彼の所謂の衝突、イナ衝突すべからざるの衝突を起せるもの、余甚た基督教徒のため之を惜む、凡そ基督教は、ステニ前述の如く、天下の大勢上、理學の進歩上、日に其勢力を縮めつゝ、

有る宗教なるに、我國一部の人が、尊崇迷信の至りに、此を以て都城寒蕪の到處に擴張せんことを謀る、何ぞ思はざるの甚しき哉、殊に其宗教たる、方今の我國の信徒が唱ふる所に由れば、斷乎たる山の如き勅語に違背したるものなれば、皇室亡び、國体悉く壞れ、忠魂義魄の人悉く死し、理學の思想悉く滅し、宇内の大勢悉く一變するの後に非ざるよりは、如何に今般の如き衝突を起すも、其衝突たるや、衝突の力無くして、自然に消滅し、且つ遂に布教の目的を達するの秋無かる可し、然則ち其教徒は果て如何すれば、其れ可ならん歟、昔し儒佛二教の我國に傳播したるは、力を帝室にかりたるに由



るのみ、基督教徒も亦須らく之を學ぶ可し、而て其力を  
帝室にからんと欲せば、今日の如く不敬にも 帝室  
に反對して、勅語に違背する有様では、とても六ヶ敷  
ければ、一刀兩斷以て 勅語に違背する處を除き、理學  
の疑を容るゝ處を掃ひ、以て立脚の地を定めは、其必ず  
庶幾からん歟

教旨辨惑終

附 錄

左之數篇ハ天台道士カ曾テ東洋學藝雜誌或ハ大  
日本教育會雜誌等へ掲ケラレタル教育上ノ意見  
ナレハ本書ニ關スル所アルヲ以テ載セテ讀者ノ  
參考ニ供ス

○宗教

(内地雜居教育上ノ卑見) 拔萃  
ニ關スル

我國憲法上信教の自由あり、而して今内地雜居問題を研究するに當り、  
尤も吾人の注意を催す者は、耶蘇教なり。蓋し其の由來する所遠く慶長  
以前にありて存す、彼所謂南蠻人即ち西班牙人葡萄牙人等の、豊後の大  
友、肥前の有馬、大村の諸藩に、セズヱイスト派の天主教を布きたる如きは  
なり。其後信長秀吉家康の禁する所となりしも、一たび輸入せる分子は、  
天草の亂となり、正雪の反となり、遂に「キリストタン」の一語は、永く國民の



二  
耳底に印し、こゝに明治となれり。維新後の耶蘇教に對する政府の處置は、之を禁ずるとなく、禁せざるとなく、暗黙の間に附したるものなり。之れも乘じ各派の宣教師は、南より東より潮の如く來り、林の如く寺院を建て、會堂を造り、學校を興し、一に其普及に盡力せり。而して今や、憲法の發布と共に、公然其自由を許さるゝに至れり。

然り而して耶蘇教宣布の目的如何に至りては、世人の久しく之を惑ひ、之れを懼れ、之れを疑ひたる所にして、余輩亦之れを判斷するに、聊か躊躇せざるを得ざるなり。蓋し一たび之れを信せんか。進んで之れを他に及ぼすべきは、其の教議の主たる所なれば、之か爲めに巨萬の財寶も泥土の如く、千里の波濤も坦途の如く、身を挺して之れが犠牲とし、以て布教に従事し、以て眞福を祈るものあるべきは、勿論のことなり。然れども一方より之れを見るときは、三公の所謂「キリスト」を嚴禁せられしも、其實耶蘇教のものの、國家を害あるの故に非らず。渠等が外面に耶蘇

教を名とし、裏面に恐るべき殖民政略を包藏せるを看破したるの結果たること、歴々憑據あり。單に過去に於て然るに非らず、露國の如き、現に今日の征服國の國精を破るに、専ら宗教政略に據れること顯然たり。而して從來我國耶蘇教傳播の狀態如何を觀るに、人或は曰く、耶蘇教の我國精に於ける、蓋し不可導の者たり。我國體は元來耶蘇教に對しては不導體なり。日本は日本魂の備はるあり。二十餘年來の盡力の其寸功を見ざる宜なりと、これ國精の何たる宗教の何たるを知らざるの致す所、固り論なきのみ。其寸功なしと言へるが如きは、例を劣等國たる亞米利加、印度、濠州等に取れるものにして、以て對等國たる我を規すべきにあらざるや、亦勿論なり。今比較的を離れ、絶對的の眼光より、從來耶蘇教の我國に及ぼす大勢如何を觀るときは、千山萬岳自ら趣をなすもの、と謂ふべし。試みに十餘年前を回顧せよ。當時の不信者たるもの、耶蘇てうその名を聞いて如何なる感を生せしや。其信者は如何なる種類の人物



なりしや。而して今日の會堂に出入するものは如何之に出入して信するとなく、信せざるとなく、社會に對して如何なる感をなすや。社會は之れを見て如何なる感をなすや。新聞雜誌の記する所を分拆せよ。青山の墓所天王寺境内を徘徊せば如何。十餘年前の會堂を回顧して今日寺院を仰け。

而して之れと相對峙する佛教の用意如何を見れば、實に慨嘆お堪へざるものあらん。外に強敵を扣へ、内に利害を共にしながら、宗派離合の紛紜に爪を磨き、敢て浮世人爵の助力を借りてなすあらんとするが如き、青年多望の學生の表に緇衣圓顛して、裏に酒を呑み肉を食ひ、夕陽緩歩得々顧慮の色なきが如き、其説く所特色の幽ふして、高なるの點を去り徒らふ卑狹近實の彼を學ぶが如き、蓋し萬里異郷に來り背水の覺悟を以て熱心布教に従事するもの敵として働くもの、する所にあらざるなり。

凡そ宗教は國精を破るに、至大の力を有するものたることは、之れを史上に校ふるお然り。之れを情理に訴ふるも亦宜しく然るべきものなり。外國に對して民心を宗教上より凝固ならしめんとし、適其君主お對し却て忠義心を減せしめたるの例、内外共に少しとせず。晚近佛國の教育制度より宗教を放逐せるが如き、耶蘇教國お於ける未曾有の大英斷にして、普國之れを見て大お驚駭せる如き、以て國家主義の益、生存競争間に行はるを見るに足らん。而るお獨り露國の之お依て征服の國精を破ると同時およく之れを以て自國の國精を注入し得る所以のものは何ぞや。他なし祭政一致なればなり。

從來露國の希望たる、世界呑併を成就せしむべき傾向の存するは、獨り其版圖人口の増加するに在るのみならず、今日世界強國中特色專有の政度あるにあり。其兵馬の力は、以てよく當時の文明を危殆ならしむるに足るに在るなり。以ふお元來スラブ人種



は自由の民にありながら、斯政體に適せるは蓋し其の性にあら  
ずして、久しく経續せる外力は習慣となりて、深く露人お染入し  
たるもの、如し。斯政度を以て久しく無學の域に放置せられた  
るものは、露人の大半を占め、皆皇帝權を以て卓美の本尊と崇め、  
聖父即ち露帝は無上の尊敬を受く、曾てピートル大帝の後アン  
ナ、アイヴァノヅナの即位するに當り、帝の權力を制限せんと言しも  
のありしも、臣民の大數は最も之お不滿を抱き、帝の無上主權者  
たるべきを要請せり、且つ露國は專制力を行ふに甚た有用なる  
機關を有せり。露國の宗旨は全く國民的にして、皇帝の浮世一時  
の威力に歸依せしむるものなり。實に壓制主義を斷行せんおは、  
隨一の機械なりと謂ふべし。上は聖會の大僧正より、下一堂の牧  
師に至るまで、皇帝の左右する所にして、露帝の斯る絶對不問の  
權力を、其の臣民に及し得るは、實に各民の宗教心に因るもの多

し、皇帝親督の僧侶は職として人民に信向心の最上義務たるを  
肝銘せしむるに勉め、一揆若くは謀反等の念は以ての外のこと  
にして、人民思想の自由なきは身體の天然力お制せらるゝと等  
しく、腦裡鐵鎖を以て縛せられ、罰を精神に受くる、恐くは軀體サ  
イベリヤ森林に追放せらるゝ、畏怖よりも甚しかるべし。

これ露國は例外として見ざるべからざる所以なり。

而して今日佛教の我國精とよく背驅せざるものは、輸入日久く全く歸  
化したればなり。其渡來して日淺かりしや、國精上よ非常の禍害を流し  
たるは、史上顯然千歳の下慄然たるものあるに係らず、國家生存を殆か  
らしめざりし所以のものは、當時交通尙未だ開けず、國家は殆と絶對の  
國にして、又之を輸入せるもの朝貢的お齎せるを以てなり。

今日對等列國の林立する如斯。交通の便利なる如斯。國家的精神の旺昌  
なる如斯。進んで二十世期お垂んとする時に於て、猶ほ歐州諸國間に耶



蘇教の國教とせられ、よく其の命脈を繋ぐ所以の者は、國別に發達せる某宗派を各別に採るに固きものなり。而るに獨り我國民の之れを取るや、總括の耶蘇教を取るものなり。人種的宗教を取るものなり。先年某學校の教員が御影を拜せざるの故を以て非職となりたる如き、某學校於て我國祭日に休業せざりし如き見るべきなり。然るも今又幾多の星霜を経て、こゝに其の成を告げ、永く我同胞の行爲を規束すべきに至らば、我倫常を壞亂し、我國精を害すること決してなしと云ふべからざるなり。

### ○德育の前途

(大日本教育雜誌)

頃日加藤弘之君が本會の常集會に於て德育に付ての一案と題せる演説をなされしが余も豫て此問題に付ては多年苦慮するものなれば始終耳を傾けて傍聽せ居りたりしに君は了りに臨み此事に關し意見を有するものは賛成と攻撃とを論なく陳述すべき旨を明言せられたり

然るに前に述べたる如く余も亦此問題には極めて緊快を感ずる者なれば茲に一言を陳べ以て君の厚意に答へんとするなり抑も此問題たる孟軻が戰國縱横の術を講ずるに際して仁義を説きたると一般にて或は迂遠にして事情に濶かれりとなすもの、世間に多かるべきは固より誰れも覺悟の事なるべけれども結局誰か之を説き出すにあらざれば到底此等の問題の自然お起るべきにあらす學者社會の協議に依り成立つべき者にあらすとの説ありたれども矢張學者社會にて心配せざれば外より名説の起るべしとも思はれず現に加藤君自から此問題を心配せらるゝを見ても知るべきなり成程學者先生が出雲の大祠に集會ありてあれとこれとあれとの評議の如き有様にては逆も纏まるべきとはあらざるべし人物の何如にある者おして孔子と云ひ釋迦と云ひ耶蘇と云ひ其他此等の教派を汲む處の宗師達が唯單に其教育を心得居ると云ふ丈のとは到底勢力を得る能ずして



十  
教育を心得居ると云ふとの外に猶ほ實踐躬行こそ肝要なれ其身お行ふと能はず其心に信せざる處の事柄を人に勸諭する杯と云ふとは到底出來へきとにあらすして苟も人を説き落さんとする位のもは自ら信すると極めて篤きを要すへし自ら守ると極めて確實なるを要すべし故に宗教道徳をして勢力を社會に有せしめんとならば其生き本尊たるもの極めて有力有徳の者おして人に指をさゝるゝ如き舉動あるべからざるの人ならざるべからず苟も此總大將にして如此適當の人物ならん乎其部下は該總督の歡心を失はざる爲には實踐躬行を主とせざるを得ずして自ら人望に負かざるの地位を守るを得べし此の如き有力者は世出する者にあらすして今より之を卜知すると能はず然らば之に依頼して宗教の改良を計るは極めて迂策と謂はざるを得ず且又今日おありて宗教等を改良せんとするは今日に信する理學の主旨と相背馳せざる様注意せざるべからず已にマルチンルーサーの

宗教を改正せしも所謂時に應したるものならん當時に比すれば今日は理學の進歩猶ほ一層著きとなれば之を包括せしむる位の大學者おして宗教の改良を計るにあらざれば到底根據ある宗教を起すと能はざるべし

從來の宗教の如きは理學の進歩およりて日々に區域を窄めらるゝ有様なれば其實際お付て之を言へば所謂告朔の餼羊おして西洋諸國と雖も昔時の如く之を妄信するの族輩は漸々に減少するにあらすや我邦に於ては従前の習慣則ち耶蘇教を擯斥せし習慣もあり加ふるに儒教の淡泊なるあり佛教の信を失へるありて何れも人心お固着するものなきお際し早已に西洋理學の思想は小學校までおも普及し疑を發するの傾向を養生せしとなれば今より宗教を獎勵するは所謂喬木を下りて幽谷に入るの類にして西洋の宗教が理學の爲めお漸次其勢力を失わんとするの跡を見ても知るべし故に余は宗教道徳の勢力は日



本にて案外に弱少なるものならんと存するなり  
 前述の次第にて理學の進歩により宗教は日々に其區域を狹縮するの  
 勢に向ひ其已に宗教に入りたるものも幾分か瘠我慢とも謂ふべき有  
 様なきにしもあらず此の如き勢なれば到底非常の有力家が故らば宗  
 教を維持せんとするの望み甚だ覺束なきものゝ如し偶宗教の上に心  
 付きたる學者あるも只單に之を器械の用に供せんとする用のみにて  
 敢て自ら振ふて宗教改良の任お當るの覺悟をなすものにあらずかゝ  
 る人達の入魂位にて決して宗教の振ふべきものにあらず否如此仕  
 方おて宗教を利用せんとするときは反て宗教の價を減ずるの恐れな  
 きにしもあらず則ち宗教とは愚人のみの信すべきものと稱し少しく  
 智識ある者には無用なりと云ひながら一身に於ては頗る智育を獎勵  
 するは自家撞着と謂はん乎何んと云はん乎實以て奇妙奇態の話なり  
 抑も宗教の妄信と理學的の推究とは互に相表裏する者なれば之を同

時に抵悟せさらしむる様に學校に於て生徒に并ひ教ゆるが如きとは  
 西洋の如く宗教の力已に先入主となりたる國柄お於ても猶且つ困難  
 なるとならん況や我國の如く新規に此等の業を起さんとするお於て  
 をや抑も西洋諸國お於ける宗教道德は小兒が母親の膝下にある間よ  
 り已に注入し居り漸く長ずるお及んては寺院にて多少薰陶せらるゝ  
 を以て冥々の中お其影響を蒙り來るものなれども之とても内心に  
 之れを信するにあらずして社會の壓制已むを得ざるものあるに因る  
 ものゝ如し故に一朝輿論の勢力社會の壓制を破るに到らば宗教は俄  
 然お其力を失ふに到るや蓋し疑ひなかるべし猶今日我邦お於て五倫  
 の道は西洋主義の爲に多少の變更を蒙りたるお一般なり昔しは仇  
 討を以て必ずなさいるべからざるの事としたれども今日に在ては爲  
 すべからざる事となりしが如きは其一例なり  
 願ふに世の進歩するに從て一騎討の功名は漸次に減少し連合の力を



必要とするに到りたれば夫の非常の善智識即ち孔子耶蘇釋迦の如きものが一人の力により衆生を一時に感化せしむる杯のとも覺束なく多くの學者輩か處々方々より研究して學問上の憲法を立つるの世の中となりたれば德育の一事に到りても遂に此範圍を出ざるべきとやらん余の考へにては已に前も述べし如く理學の趣旨と相背馳せざるの教旨によるにあらざれば自今以後の德育は逆も覺束なく思はるゝなり故に或は之を理學宗と謂ふも可ならん乎即ち余か曾て屢陳述せしかの人事も物理の定則を離れずとの趣旨に基づきて教を立つると之なり蓋し西洋諸國の如きも早晚此理學宗なるものゝ中に生息するに到るべしと雖も尙宗教の力存外強きを以て未だ其場合に至らざるのみ幸ひに我日本は宗教上の檢束少なき處に理學的思想案外速かに進歩したるとなれば此理學宗こそ我東洋より西洋に向て説明すべきとなれば此理學宗こそ一人一個の固信に依るべきにあらざし

て學者の協議にて成立すべき憲法ならん歎敢て加藤君其他問題に關して緊快を感ずる諸君に質す

○學校德育論再質加藤君 (東洋學藝雜誌)

維新以前士族風の教育を見るときは七八分通りは德育にして學校若くは之れに類する場所に於ては概ね皆此教育法に依らざるはなし而して其德育の方法に至りては儒佛混合とでも云ふべき格言を服膺し之を實踐躬行せしむるに在りとす是れ等の學校若しくは之に類する場所に於て教育を掌る處の教員は嘗て書物上の知識を授くるに止まらずして其他日常百般の事に至るまで皆子弟輩の標準となるに足るの資格を備ふるを常とせり尤も其人物の學識才幹等に依りて其及ばず處の影響にも亦頗る廣狹の度を異ふすと雖も兎も角に教育の任に當るものは一種の品格を有せしや蓋し疑ひなかるべし

蓋し我國に於ては古來儒佛混合の体裁て學問上の事柄は凡て成立



ち來りし者なれば因習の久しき遂に此混合物を以て一般教育の方法となすお至れり然れども我國おは自ら我國一種の國体ありて所謂祭政一致の國体なれば皇室の位地は常お外國より入り來りたる思想の上におりて儒佛等の道に至りても常に皇室に依りて重きを加へたるが如き事實あるは之れを我國の歴史に徴して明かなり鎌倉の覇府以來は儒佛の道亦覇府の左右する處となるに至れり右お述ふる處より之を見て直に又法律と道德との關係を推知し得べし即ち昔日に在つては今日の法律お比すれば大お道德上の意思お因りて法律を斟酌せし處ありしと之れ也夫れ斯の如く殆んど法律に依りて道德を維持せしか如き体裁あり従て政治家なり法律家なり其局面に當る者も勢ひ道德家たらざるを得ざるの傾向ありしは免かる可からざるの數なり然れども此組織にて萬事皆な其權衡を得たれば社會の秩序自ら紊亂せざるを得しならん

以上陳ふる處お依れば従前の學校教員は余の常に主張せる日本教員の資格を有せしものおして即ち西洋の教員兼僧侶の位地に立ちし者なり故に是等の教員をして今日の時勢お際し昔日と同一の影響を及ぼさしむると能はずと雖ども教員たるの品位上に於て尙お見るべきの點なきにしも非ず然るに維新以後お至りては智育德育等の別を立て法律と道德とも漸次に其間に徑庭を生ずる處ありて又舊時の風を存せざるに至れり是れ所謂西洋の直譯若しくは翻譯なるへけれども西洋に於ては尙お社會の一大原素たる宗教なる者ありて秩序を整理する上に於て其効甚だ多し即ち西洋の學校に於ては主お智育を施せども別お寺院お於ては宗教を以て徳性を養ふの道あり法律と道德とは全く相區別すと雖ども法律嚴に過くるの場合お於ては人民の道德心期せずして相會し終に法律を左右するの力なきにしもあらず如此西洋に於ては又社會の秩序一種特別の形にて權衡を得るは猶お我國



の昔日に於けるが如し  
 斯の如く論し來るときは乃ち夫の學校の德育には昔しの儒佛二教の上  
 上に耶蘇教も入れたらば如何んと云ふの思想も起るべしと雖も西洋  
 に於て耶蘇教の勢力を社會上に占めたるとは決して儒佛の兩教か我  
 國の社會上に勢力を及ぼしたるが如き弱小なるものあらず故に今  
 日に在りても尙ほ社會の他の大原素たる法律學術等の如きものと相  
 對して尙ほ其勢力を専らにするを得るなり是千百年の因習の致す  
 處にして一朝一夕の事にあらざる也如此淵源ある宗教なれども人智  
 次第に進むに従て漸々衰退するの勢ひに立至りたるは如何に負け客  
 みの強き宗教家と雖も蓋し争ふと能はざる處ならん  
 於是乎今日我國學校の德育上お於ては實に言ふべからざるの困難を  
 免かれざるものあり即ち一方に於ては昔日の儒佛混合体の教員をし  
 て德育の先導者たらしめん乎三尺の童子と雖ども誰れが復た昔日の

如く百般の標準を彼れお取るものあらんや若し標準を彼れに取るか  
 如きあるに於ては早晚社會に立ち常に一步を人に輸するか如き有様  
 に立至るべきや蓋し疑なかるべし否な今日德育の振はざるを慷慨す  
 るの學者教育家等が世に多きは即ち取りも直さず從來の儒佛混合先  
 生にては是等の慷慨學者を満足せしむるの教育を施し得ざるを見る  
 べきなり然らば論者は是れ等の古物先生を如何に燒き直して將來の  
 用お供せらるべきや余の甚だ問はまはしく存する處なり  
 前述の勢ひなれば先づ從來の德育先生にてはちと損育とも相成るべ  
 き傾向あれば當てにならぬ者と見做した處で差引勘定すれば耶蘇教  
 が残るととなれり處で耶蘇教が如何なるかを教へるかと云へば儒佛  
 杯の説く處に比して氷炭相容れざるが如きとを教ゆるにあらず矢張  
 善要邪正とか云へるを懇説するに外ならざるべしよしや少しの差  
 はあるにもせよ人殺し盜賊を以て善事とはよもなさいるべき筈也然



らば如何なる點に於て前の二教と其趣を異にするやと問はゞ唯西洋傳來と云ふ一點外ならざるべし近來は頻りに舶來物の流行する世の中となりたれば之れも舶來だからとて賞翫する茶人もあるべけれども先づ云はゞ日本酒とビールとの違ひ位ひに見倣して可ならん但し此點に於ては唯耶蘇教を以て道德を教ゆるの一方便としたる考へなれども夫の宗教としたる點よりは業ふ已に理學と交戦し漸々に本陣迄へも斬り込まれ敗色を顯したる處なり此落武者の輩が東洋諸國等の如き所謂半開國へ來りて別天地を開かん抔と云ふことを企つるかも知らざれども我國に於ては已に理學の八陣を布き東洋學藝雜誌と題する旗を押し立て威風凜々と備へ嚴重にして待ち構へたれば一二の輩が辛ふじて哨兵線を潜り抜け入り込むものなきを保し難けれども兎に角く我國内に於て勢力を得ると夫の西洋諸國の昔時に於けるか如き有様に立ち至らざるべきは蓋し疑を容れざる處なり然らば

耶蘇教もドーヤラ餘り頼も敷なさそうなり

そこで余は曾て一種の主義を呈出せしとあり拙著の鬼哭子、鬼笑子、鬼怒子、日本教育原論及び大日本教育會雜誌第六十八號等に散見す雖然之れは主義の論にして之れを學校一般に實施する方法に於ては別問題にて余が茲に論述し置かんとを欲する處なり日本には三千八百萬の人口ありと稱すれども之れを左右するものは上流社會少數の團結にて事足るべしと余は思考す故に此問題に於ても此趣旨に基きて述ぶる處あらんとす已に此篇の始めに於て論せし如く我國は最早昔日の如く政治法律道德相待つて權衡を維持したるの有様ならずして寧ろ西洋流なりと謂はざるを得ず然れども從來の習慣は尙は存し西洋の宗教は入込み難きの事情、あれは學校若しくは之に類する場所に於て之れが責に任するより外に手段あるとなし而して其をして有効ならしむるには其職に任するものは學術優等の外に品行志操才能並ひ



備はりたるものを任用せんことを力めざるべからず而して已む之を任したる上劣等の品位に下るものあるときは遠慮なしに之を擯斥せざるべからず是れ等の事假令ひ公然たる法則となす能はざるにもせよ學者教育家の上流に位するものが團結して之を決行したらんには決して無益の業とはならざるべし且つ夫れ是れ等の上流社會に於ても自ら死地に陥りたるの有様ひて勢ひ自ら反省する處なかるべからず是れ余の特に學者教育家中ひ於て上流を占むるの諸士に向て希望する處に於て特ひ學士會院の會員諸君には尤も望みを屬する處なり

○加藤弘之君の德育論 (讀賣新聞)

頃日大日本教育會の總集會ひ於て加藤弘之君の提出に係る德育方法案の討議ありしが時間の都合により僅に其端緒を開きたるのみにて終りたるは遺憾の至りなりき願ふに德育の事たる近來教育社會に於ての一大問題となりて教育に關する新聞雜誌等ひは陸續論述する所

あり是れ素より左もあるべきとひて假令へ智育なり体育なり如何程に發達するとも此德育の元素を欠きたる以上は教育の精神を欠きたりと云ふも敢て不當ひはあらざるべし道士も從來此問題に關しては緊快を感ずるの一人なれば夫の德育方法案の討議を充分に盡すと能はざりしは殊に遺憾とする所なり然れども其大要に至りては加藤君が昨年中大日本教育會に於て演說せられたる所の者に外ならず即ち加藤君の主張せらるゝ所は中○小○學○校○等○の○德○育○は○宗○教○に○依○る○べ○し○の○趣○意○なり而して加藤君の宗教中ひは儒教をも含有すとの話しなり語を換へて之を云へ凡そ德育に導くべき一主義は假令へ純然たる宗教ひあらざるも準○宗○教○の取扱ひをせらるゝやに承はり及びたるなり已に斯く云はるゝ以上は加藤君の宗教に採らるゝ所のものは其本旨にあらすして寧ろ其德育の方法となるべき點ひありとす何となれば加藤君は其宗教の何たるに係はらず現今我國に行はるゝ所の宗教は總



て之を採用せらるゝのことなればなり扱て道士は此事に就き既に再三加藤君に質す所ありしが頃日の討議會に於ては定めて充分の説明も承はることならんと豫定せしに前陳の如く議了するに及ばざりし故此に聊さか從來未だ盡さゞりし所を陳述し以て全君の參考に供せんとするなり

扱て第一に申上んと存する點は德育は學校に於て教導する丈けのことにて充分とせらるゝや否やの點是れなり道士は豫て通俗教育の力頗ぶる盛んにして從來の所にては到底學校教育を壓倒するの傾きなきにしもあらずと信する者なり此通俗教育と稱すべき範圍内には演戲、軍談、講釋、淨瑠璃、俚歌、新聞、雜誌、角力、玩具等ありて是等は夫の學校に於る御儀式通りの德育扱とは違ひ面白半分にて見聞する所なれば人の精神に浸潤すること極めて深く随つて若し有益とせんか其益たる尤も大なれども若し有害とせんか其害も亦従つて大なるべきは理當

に然るべき所なり是等の通俗教育と稱すべき事柄が今日我國の人民の德育上に如何なる影響あるやを研究し及ひ是等の事柄は如何なる根底を有するやを研究するは德育の方法を講究する上に於て欠くべからざるの要訣ならん尙ほ此を併言すべきは刑法治罪法等の法律の西洋主義を採りて編成せられ且つ實施せられたることが如何なる影響を我國の德育上に及ぼしたるやを研究することは是なり尙ほ其上に云ふべきことは封建の制度廢せられてより昔しの侍風は漸々に衰へ加ふるに維新創業の際所謂大行は細瑾を顧みずとやらの英雄風のはれし者が尙ほ今日も存する等によりて一種の習慣を養成し遂に加藤君を初め教育社會に於て德育を主張せざるを得ざるの境域に陥りしならん

斯く説き出さば其れは今日已に成人したる者も就きて云ふべきことにて現今及び將來小學に入りて教を受くべきものに云ふべきことに



あらずとの説もあるべけれど是も亦大なる謬見なり例へば此も天保時代の一初老人ありとするに此人にして一兩人の妻を置き妻の所生とを合して全年輩の小兒數人ありとせんか是等の小兒が稍成人したる後に徐々と放蕩を始め出したらんには此の天保先生は如何様に訓誨を下さるべきや随分面倒なることならんと推測するなり去りとして今日の西洋主義おして妻を置く杯と云へることは如何にも不都合なるが如しと雖も從來の習慣にては左様に不都合なることにてはなかりき此の例たる極めて簡易なるが如しと雖も能く分析して之を玩味したらんおは徳育の沿革上頗ぶる参考となるの數要點を含有するを見ん

茲に掲出したる天保時代の初老先生の舉動を分析するに先づ第一妻を置くと云ふとは從來の習慣おては番お不都合なきのみならず或る場合に於ては之れを置かざる方こそ却つて不都合なりし場合もなき

にしもあらず即ち儒教主義に據るときは婦人の七去中にも子なければ去ると云ふ一ヶ條もある位のとにて場合に據りては所生なきの妻は其夫に勤めて妻を置かしむる位のとさへありたり是れ素より繼嗣を重んずるより生じたるの習慣なるべく將來我國の親族系統上お於て從來の組織を變換せざる間は尙ほ此風の繼續するとなしと云ふべからず故に此置妻の一事お就て之れを見るに唯單お西洋人お對して不都合なりとか不体裁なりとか或は尙一層高尚なる議論に於ては世界の男女は同數なり故に一夫一婦は天地の常道なりと云へる様の論旨より之れを擯斥するに至りたれども是等が果して廢妻の論據として確實なるや否やを研究せざるべからざるなり

西洋人に對して不体裁なりなど云へども西洋人にも随分妻を置く者なきにしもあらず夫のラシヤメンとは如何なる者なるやコンキエバインとは如何なる者なるや等より段々詮議したらんおは餘り珍らし



きとにてもあらざるなり而して此等は假令申し譯ふもせよ夫の繼嗣の事には關係なくして純然たる玩弄物と爲す次第なれば猶更以て不都合なるが如し尙ほ其の他娼妓藝妓等のとあ至りても之れを細論せば西洋にて行はるゝところの者と東洋に行はるゝ者との利害得失等未だ以て輕易に判定すると能はざるべし況んや我國あ於て是等のとを細論したらんには終には國体上に天機を漏らすの恐れあるに於てをや又た一夫一婦は天地の常道なり杯と云ふ論あ至りても天地の常道に放任し置くは果して人類の本色なるや否や是れ亦甚だ疑はしき話にて試みに世の中の事物を見聞したらんには天地の常道に放任し置かざる所謂人造物の夥しき實に枚擧あ暇あらざるべし夫れ斯の如く天保先生妾を置く理由は何れの點にあるや判然せざれども兎に角日本の社會にては今日のところにては先つ々々夫れが爲め社會より擯斥さるゝと云譯にもあらず場合によりては食前方丈侍妾數百人を

以て人に驕るの族さへある世の中なり獨り近頃に至りて西洋の修飾主義を主張するものゝ中あは隨分之れを非難するものあれども道士の茲に陳述したる事由を詮議して然る後廢妾の論を立てられ度希望するなり右の次第にて今日のところにては置妾のことは全く珍らしきことにもあらずして茲に擧げたるが如き例は隨分世の中にあることならん而して其小兒等が生長したる後ちあは遺傳歎習慣歎は知らねども親の經歷を見聞するに於ては自から放蕩の方あも流れ易く之れを訓誨するに於ても親の威光も隨つて少く結局實子の處置に困却する杯と云ふ場合なきにしもあらず願ふに是等の息子達は親とは違ひ西洋風あ幾分か吹かるゝところありて男女の交際を求むるの傾きありて其方向を採るあ於ては夫の親か繼嗣の口實を設けて妾を置くと同様に男女の交際の當然なることに論據を据へ終に藝娼妓を相手にすることを一種の薰育とまで見做すに至れり加之日本の少年は



存外夙成にして例の通俗新聞等に據り實例を見聞し其養成を受くること一朝一夕にあらす是れ只だ德育上の議論を成すに當りては頗る複雑なる事情あるの一例を示したるのみふて其他のことに至りては猶は無數の實例あるべし

故に今日學校の德育方案を立つるに當りては宜しく從來の沿革と將來の成り行きとに着目して之を定むるにあらされは到底好結果を得る能はざるべし然るに今其根據さへ未だ確かならざる宗教を一時の方便に假りて德育の方案を立てんとするが如きは余り德育を輕々視したるの形跡あるを免かれざるが如し是れ道士の甚だ感服せざる所にして尙は次を逐ふて評論する所あらんとする所以なり願ふに已む述へたる如く今日我國の社會に於て行はるゝ所の風俗習慣は自から其沿革ありて決して一朝一夕に起りたることにあらす殊に宗教上の事に於ては我國は一種特別の組織を有し古來他國の宗教若くは準

宗教が如何程浸入したるも何れも皆な帝室の勢を藉りて初めて其影響を普及するを得たり即ち道士が常に主張する如く我國の國体には一種他に異りたる所ありて所謂祭政一致の制度は今日に至るまで我國民の固結力を固くするの最大元素にして今日より以後は外國に對しては益々此組織の必要を感ずるなるべし故に今日從來より傳はりたる佛教儒教等の上に尙ほ耶蘇教をも我日本に普及せしめんとするに於ては夫の古昔あつて帝室にて儒教及び佛教を尊崇せられたる如く今日の帝室に於ても全様に耶蘇教に向て尊崇の道を開かるゝにあらざれば到底論者の目的を達すること能はざるべし然るに從來の儒教及び佛教は國內に普及せしにも拘らず德育の方法としては餘り効力なかりしものと見え遂に加藤君の慷慨心を惹起すに至りしならんと果して然らば將來に望みある宗教は耶蘇教の外之なかるべき筈なり茲に於てか耶蘇教を普及せしめ且つ其れをして勢力を得せしめ



ざるべからず其之をなすには前記述ぶる如く帝室の力を藉るゝあらずんば到底行はれ難かるべく遂に夫の元龜天正時代の大名中お耶蘇教を奉したる者の如く天主閣を皇居内に起すか如き場合お立ち至らざるべからず勿論斯の如きことをなして我國民の幸福を増進するお相違なしと明言し得べきことならば或は之を請願するも可ならん然るに道士の見る所を以てすれば斯の如きことを履行したらんには當に人民の幸福を増進せざるのみならず却て國民をして非常の困難お立至らしむるの恐れなきにしもあらず即ち内外國の奸智に長けたる政策家は之を奇貨として如何なることを仕出すやも計り難く爲めお國民の不幸を醸すとなきを保し難し斯く云はゞ反對論者は云はん左程に深入りせずとも随分淡泊に宗教を利用し得べしと道士を以て之を見るに是れ亦大なる誤りにして宗教なるものは決して其の性質上淡泊を以て成立すべきものにあらず必ずや之に凝り固まりて所謂夢中

おなると云ふ場合にまで立ち至るおあられざれば到底之を利用するも効力なかるべし即ち人をして夢中ならしむる程の効力あるものなるか故に萬一其方針を誤らしめば其濫用は實に恐るべきの結果を生ずるや之を古今の史乘に徴して明らかかなり故に假令宗教に依りて德育の方案を立て得べきものとするも尙は其利ある所のみを豫算せずして其害の因て起るべき所を講究すること極めて必要なり況んや德育の方法となすに足るとき未だ斷言し難きの事情あるお於てをや道士は今本案を評論するお當り次の二點を以て其要領をなすべし

一、宗教と理學とを並べ教ふるの結果

二、宗教德育を授くるには如何なる人物を用ふるや

第一宗教と理學とを並べ教ふるの結果は如何あらんと講究するに當り道士は今日西洋に於ける宗教の勢力に付て見聞したる處を一言せざるべからず願ふに西洋諸國に於ても宗教の勢力は理學の爲めに漸



次其範圍を制限せらるゝに至りたるは疑もなきことにて將來益々其勢力を失ふに至るや略ぼ豫知すべきなり蓋し西洋諸國に於ては子弟を養成するに當り懷抱にある頃より業に已み宗教の空氣を呼吸せしめ其浸潤するや決して一朝一夕の事ならず猶ほ今日我々と雖も夫の幽靈怪物の妄想は腦裏に其痕跡を存するか如き傾きあるを見ても幼時の習慣は容易に拭ひ去り難きものあると一般なり加之ならず稍や生長する後と雖も其家庭に於ても亦常に其空氣を圍繞され日曜毎には寺院に於て説教を承はるの習慣もあれば宗教の思想を培養繼續するの道あれば一般人民の氣風は宗教上の信用とでも稱すべき一種の徳教ありて例之裁判所に於ても宣誓式をなすの習慣ある等凡て信用の證據ふは必らず宣誓を以てすれば社會組織上の基礎は今日の處にては宗教の勢力實に盛んなりと謂つ可し故に如何なる學者と雖も理學上より宗教を攻撃し若くは宗教を疑を容るゝ等の舉動あるに於

ては社會の輿論は之れを不道德と見做し爲めに信用を失して事を爲す上に於て大に障礙を受くることありて遂に所謂社會の壓制なるものを受け已むを得ず宗教を尊奉するが如き外觀を呈するものも亦少ながらす

是れ固より宗教の頗る盛んなる國の有様なれども理學の思想大に進歩したる國に於ては漸々宗教は其勢力を失ひ假令之を破壊すること能はずとするも已に之れを對して疑を生ずる以上は宗教の宗教たる所以の本色を失ひ又加藤君の望まるゝが如き効能を有せざるべし而して其疑を生ずるの幫助をなすものは即ち理學の勢力に歸せざるを得ず願ふに宗教の方便とし來りし處は所謂神變不可思議の事にありしかども怪力亂神も理學の照魔鏡を照されては道るゝに道なく終に化けの皮を現はしたるもの其例甚だ少からず近くは日本に於ける佛教各派の開祖たる名僧の事蹟に付て之を徵するも奇異不可思議の言



以傳へをなす場合甚た少からず然れども今日理學的小之を研究するに於ては大抵之が説教をなすことを得て其應さに然るべき所以の理を發明すること往々之れ有り故に今日に於ては如何なる名僧と雖とも最早斯の如き籠絡手段を以て世間の人を瞞着すること能はず矢張り道理を根據として教を立てるにあらざれば其効能は甚だ少なかるべしと思はるゝなり西洋諸國と雖も已ふ斯の如きの有様なるに我國の如く古來宗教の勢力如此夫れ熾んならざるの處なるに維新以來は西洋お於ても新鮮と稱すべき空氣は宗教の入り來らざる前業お已に浸入し來り國民の思想は業に已に西洋の非宗旨家の薰陶を受けたりと云ふも可ならん斯く宗教を後にして他の思想の先入したる所以は一にして足らざるべしと雖とも第一には我國體之れが遠因をなし近くは徳川氏の全盛に當り嚴に耶蘇教を禁制したるの結果なりと謂はざるを得ず從來の所謂切支丹邪宗門禁制の制札は國民一般の目撃せ

し處にして因襲の久き遂お之を厭忌すること恰も夫の幽靈怪物を厭忌すると一般なりき如此養成を受けたる人物の子弟輩は如何なる薰陶を受けたるや夫の西洋の子弟か幼少の時より宗教の薰陶を受けたると一般に非宗教の思想を養成したりと謂ふも可ならん然るお今加藤君は如此西洋に於ても漸次其勢力を失はんとし我が日本お於ても從來より業お已に厭忌したるの宗教即ち耶蘇教を國民德育の基本となさんと企てらるゝは甚だ覺束なき方案なりと謂はざるを得ず而して同君は佛教儒教等をも併用すべしとの申分なれども是れ等は從來已に德育の基本となりたる者おて同君は是等の勢力を以て不十分とせられしより方案を立てられたるとなるべければ同君の宗教とは主に耶蘇教なりと稱するも敢て不當にはあらざるべし此耶蘇教なる者に付ては道士が茲お縷述せし如き事情あり之を學校の教科に加ふるに當りて其傍らに宗教の根底を破壊せんとする理學の諸



科目を教授するに於ては如何なる結果あるべきや智者を待つて後ちに知らざるなり故に道士は内外の事情より之を推して今日我國に於て新に宗教の勢力を借り用ひんとするが如きは到底行はれ難きとにて道理を基きたる德育を必要とする所以にして即ち所謂理學的なるものゝ我國に適應せん事を主張する所以なり若し夫れ之を實行するに當りては所謂其人存すれば則ち其政舉り其人亡すれば則ち其政息むの道理なれば其人物の採擇に付き道士の意見を吐露して以て本論の局を結ばんとするなり願ふに何れの德育方案に依るも到底之を實行するの人物如何に因りて擧否を決すべき譯なる以上は之を撰擇するの場合に於ては尤も鄭重に鄭重を加へざるべからず今日の如き中小學の有様にては假令へ同君が如何なる名案を提出せらるゝも恐らくは好結果を見ると能はざるべし然らば即ち到底今日の學校の景況にては德育の方案は實施する能はざるか道士は學政の組織に因りては

今日と雖も尙ほ之を改良するの方なきも非すと信する者なり請ふ試みお卑見を陳述せん

先づ第一に今日社會の輿論は果して德育杯の事に就き注意する處あるや否や道士の見る所を以てすれば或は刑法に觸れざる限りは何事にても之を施行して通常道德の範圍を出づるも敢て顧みざるものあるが如し然れども若し其人の才力ありて其失徳を蔽ふに足る者ある時は其政治社會に商業社會に出て頭角を露はし得ると夫の品行方正の評判ある人物より反つて易々たるか如し蓋し亂世に在ては夫の陳平の場合の如く寧ろ其才を賞して其徳を不問に措くの有効たるを認むるの必要を感すべしと雖も社會の秩序漸く將お立たんとして整理を主とするの日に在ては斯の如き變則即ち權道は大に其弊を残すの恐れなきにしもあらず況んや我國の如く古來道德を以て法律の範圍に迄大影響を及ぼしたる國柄に於てをや然るを前おも述ぶるが如く



一度法律の世となりて以來夫の西洋に於ける如く之に對するに一種の勢力即ち宗教の如きものありて假令へ法律上の制裁を受けざるにもせよ宗教を基礎としたる輿論に直接に間接に法律外の罪を鳴すの組織あれども我國に於ては斯の如き勢力に乏きを以て遂に亂世に處するの道を以て平常に處するか如き外觀を呈するに至れり是れ即ち今日德育を實施するの際に當りて最も困難とする處なるべし然らば即ち德育の方案は所謂畑水練となりて到底實施するの手段なかるべし歟

其位に在らざれば其政事を講らすと云へることもあれは道士が敢て隊を容るべき處にはあらざるかも知らねども到底我國に於ては尙今日の處は古來よりの習慣に依りて其筋に於て之に着手せらるゝより外好手段なかるべしと信ず而して道士の考へを以てすれば先づ高等の學術及び教育に關する場所より之を始むるを以て尤も着手し易し

と想像するなり但し尙は一步を進めて政治社會より之が改良を計るは尙更以て有効なるべしと雖も今日の政治社會は尙は亂世的の政治社會たるを免かれざれば寧ろ陳平的の人物を採擇するは却て時情に適合するならん然れども學術教育に關するものにて將來治世的の諸原素となるべき場合に於ては德育の標準を用ひて人物を測量するは決して不常の事にあらずして夫れこそ德育方法案實施の第一着なれば則ち學士會院なり大學校なり高等師範學校なり教育上至大の勢力を有する場處に於て其局に當る人物には十分に其德義節操品行等所謂德育を受けたるもの、標準となるべき品性を備へたるものを採擇することに注意し其部下を風化せしむることは尤も有力なる方案にして之に次ぐ者は學校卒業生の團結して儕輩中の失德者を矯正排斥して社會に立つ上に於て非常の不便を感せしむるが如き組織を建つるに在り願ふに此事たる之を實行すること決して困難なき少しく之



を誘導するの有力者あらんには直ちに其實際を行はるゝを見ん而して此事たる假令如何なる方法に依りて徳育の前途を經畫するおもせよ到底其實施の際には茲に述ぶるが如き手段に依るより外仕方なかるべしと道士は自信するものなり其他には唯一の方法の存するありは耶蘇釋迦孔子等の如き豪傑が再出せんことを祈るに在る而已嗚呼牡丹餅は棚より墮ちず寧ろ之を敲き落すの手段こそ今日の世の中に必要なれ

附錄終

明治廿六年八月八日印刷  
 明治廿六年八月十二日發行

定價金貳拾錢

著作者

杉

浦重剛  
東京市小石川區久堅町十  
九番地

發行者

井

上蘇吉  
東京市神田區錦町三丁目  
一番地

印刷者

仁

科衛  
東京市日本橋區藥研堀町  
三十三番地

印刷所

厚

信舍  
東京市日本橋區藥研堀町  
三十三番地



東京市神田區裏神保町一番地

發賣所

敬

業

社

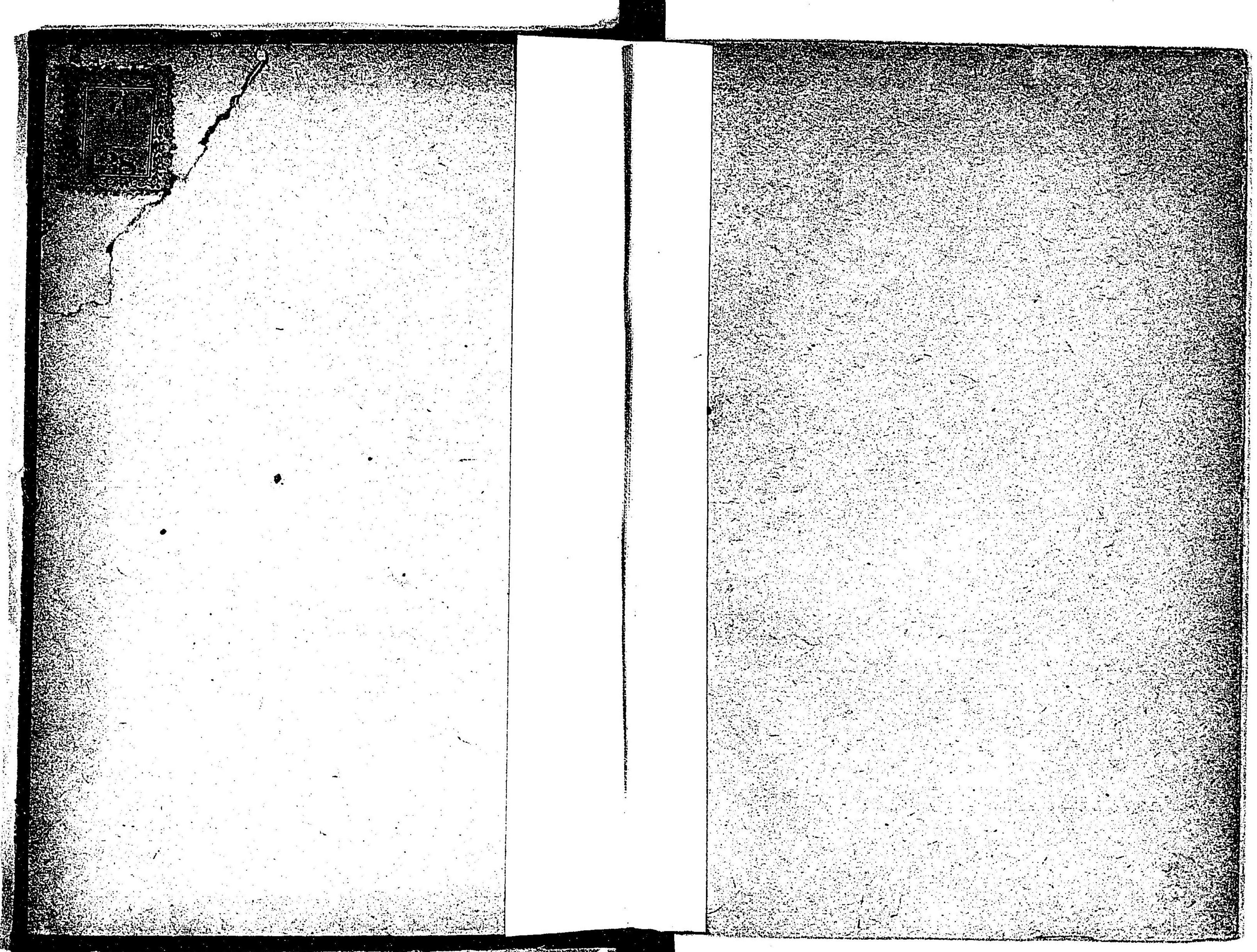


# 各地賣捌書肆

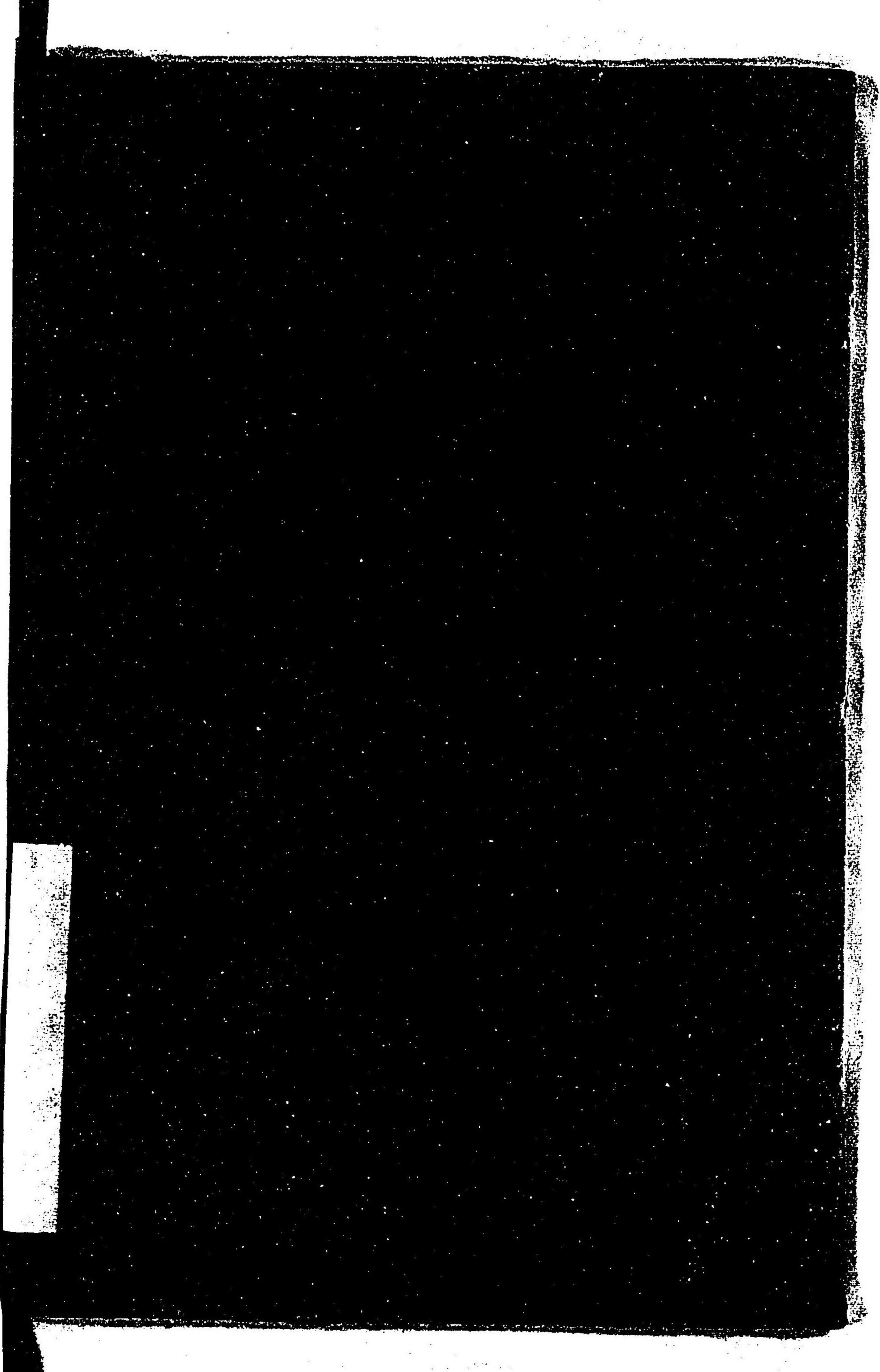
大坂市備後町四丁目  
 東市日本橋區通三丁目  
 全 神田表神保町  
 全 京橋區竹川町  
 大坂市備後町四丁目  
 全 南區心齋橋二丁目  
 全 北久太郎町  
 全 北久寶寺町  
 全 古屋市本町三丁目  
 博多市中島町  
 全 筑後久留米市米屋町  
 佐賀市白山町  
 長崎市酒屋町  
 熊本市新町  
 鹿兒島市仲町  
 長野市大門町  
 秋田市大町二丁目  
 越中富山四十物町  
 山口市中町  
 北海道札幌南一條

敬業社出張所  
 丸善商社  
 中 西屋商邦  
 共 益商  
 梅 原益龜  
 石 井 鈞 三  
 吉 岡 九 平  
 松 原 喜 兵  
 柳 村 喜 兵  
 三 木 喜 兵  
 川 瀨 東 代  
 片 野 東 四  
 森 岡 善 支  
 積 岡 善 支  
 菊 善 支  
 河 內 壯  
 安 中 半  
 長 崎 幸 次  
 吉 田 幸 兵  
 西 木 喜 兵  
 鈴 田 鐵 太  
 中 田 英 武  
 小 鹽 武 吉











70

138

020401-000-3

70-138

教旨辨惑 一名, 所謂衝突に就て

宮崎 繁吉/記

M26

ABI-0210





